

2021年度 教育・入試改革対応に関する調査 集計結果ご報告資料

2021年9月
(株)ベネッセコーポレーション
教育情報センター

このたびは「教育・入試改革対応に関する調査」にご協力いただきまして、誠にありがとうございました。ご多忙の時期のお願いとなりましたことを改めてお詫び申し上げますとともに、心より御礼申し上げます。

弊社では、今回の調査結果を受け、よりご指導のお役に立てる情報を引き続きお届けできるよう努めて参りますので、貴校でのご指導の一助となれば幸いです。

集計結果ご報告資料 目次

1. 調査概要と回答校の属性	1
2. 教育・入試改革への取り組み状況と課題感の経年比較	2
2-1. 教育・入試改革に向けた取り組み状況の変化	2
2-2. 教育・入試改革に向けた課題感の変化	3
3. 大学入学共通テスト	4
3-1. 大学入学共通テスト 結果に対する認識	4
3-2. 大学入学共通テスト 今後の対応が必要な問題	5
3-3. 大学入学共通テスト 想定以上に得点できた生徒の特徴	6
3-4. 大学入学共通テスト 意識して行ってきた指導	7
4. 学習指導の状況	8
4-1. 学習の質を高める指導	8
4-2. 生徒の学習に関する課題	9
5. カリキュラム・マネジメントの取り組み状況	10
6. 探究 取り組み状況・期待と実感	11
7. 進学指導の状況	13
7-1. 進路指導の状況	13
7-2. 学校推薦型・総合型選抜の指導	14
8. 新型コロナウイルス感染症への対応	15
新入試 1期生総括セミナー ダイジェストレポート	16
「新課程 1期生入学に向けた学びの設計と実践」 セミナーダイジェストレポート	20
第1回 学習評価の充実に向けてすべきこと	20
第2回 生徒のやりたい！を引き出す「探究的な学び」実践の第一歩	24
第3回 育てたい資質・能力の設定と授業実践の第一歩	28
第4回 新課程 教科「情報」に向けて 今、始められる準備	32
ベネッセハイスクールオンライン 新課程レポートのご案内	36

1. 調査概要と回答校の属性

調査概要

- 調査テーマ 学校の教育・入試改革への対応状況と意識調査
- 調査方法 郵送によるご依頼、FAX・WEBによるご回答
(回答方法) FAX 26%、WEB 74%
- 調査対象 全国の国公立・私立高等学校、中等教育学校の進路ご担当先生
- 調査時期 2021年2月19日～3月31日
- 有効回収数 1,024校

回答校の属性

設置区分	
公立	68%
私立	32%

学校規模（2020年度卒業生数）	
100人未満	18%
100人以上200人未満	30%
200人以上300人未満	29%
300人以上400人未満	16%
400人以上	6%

地域	
北海道	8%
東北	10%
関東	9%
首都圏	19%
北陸	3%
中部・東海	11%
近畿	11%
中国・四国	13%
九州・沖縄	15%

共通テスト志願者の割合	
1割未満	27%
1割以上2割未満	11%
2割以上3割未満	6%
3割以上4割未満	7%
4割以上5割未満	4%
5割以上6割未満	4%
6割以上7割未満	5%
7割以上8割未満	5%
8割以上9割未満	7%
9割以上	24%

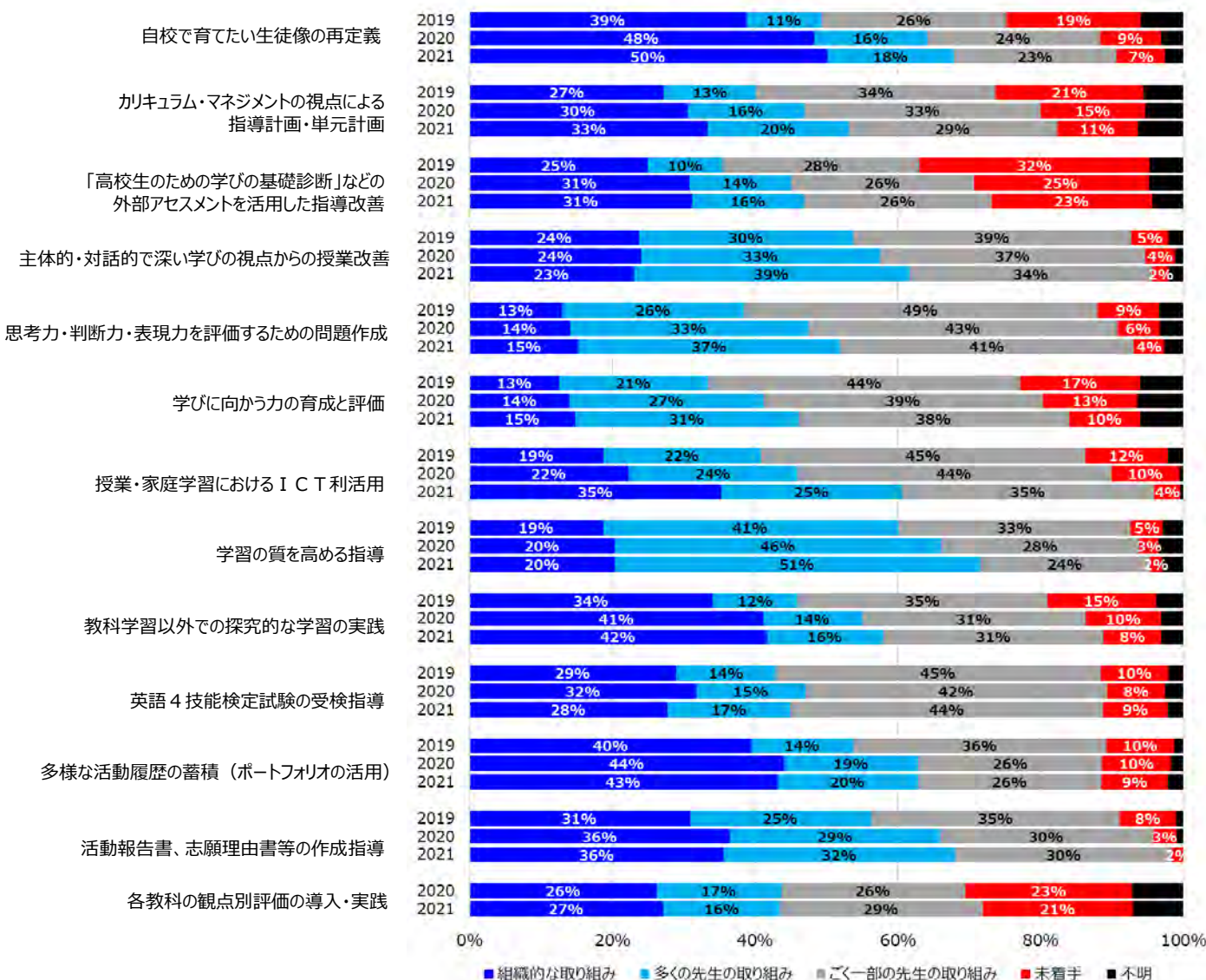
2 - 1. 教育・入試改革に向けた取り組み状況の変化

この3年間で教育・入試改革に対する取り組みは全体的に進む。

教育・入試改革に向けた取り組み状況と課題感について、3ヶ年を比較したグラフを本ページと次のページに示した。「組織的な取り組み」+「多くの先生の取り組み」の回答率は、制度変更があった「英語4技能検定試験の受検指導」と「多様な活動履歴の蓄積（ポートフォリオの活用）」などを除いてほとんどの項目で徐々に取り組みが進んできている。

2020年から2021年にかけて最も取り組みが進んだのは「授業・家庭学習におけるICT利活用」であり、新型コロナウイルス感染症拡大の影響やGIGAスクール構想などによってオンライン授業やICT教材の活用が進んだことが背景にあると考えられる。取り組み状況が進んでいる一方で、課題感についても増大がみられる。急激に活用が進む中で、新たな課題も生じてきているとみられる。

教育・入試改革に向けた取り組み状況



※年度によって質問項目が一部異なる場合がある。

(例：「高校生のための学びの基礎診断」が「高等学校基礎学力テスト」となっていた、など)

※ 2021年度は1,024校、2020年度は1,060校、2019年度は1,400校より回答をいただいた。

2-2. 教育・入試改革に向けた課題感の変化

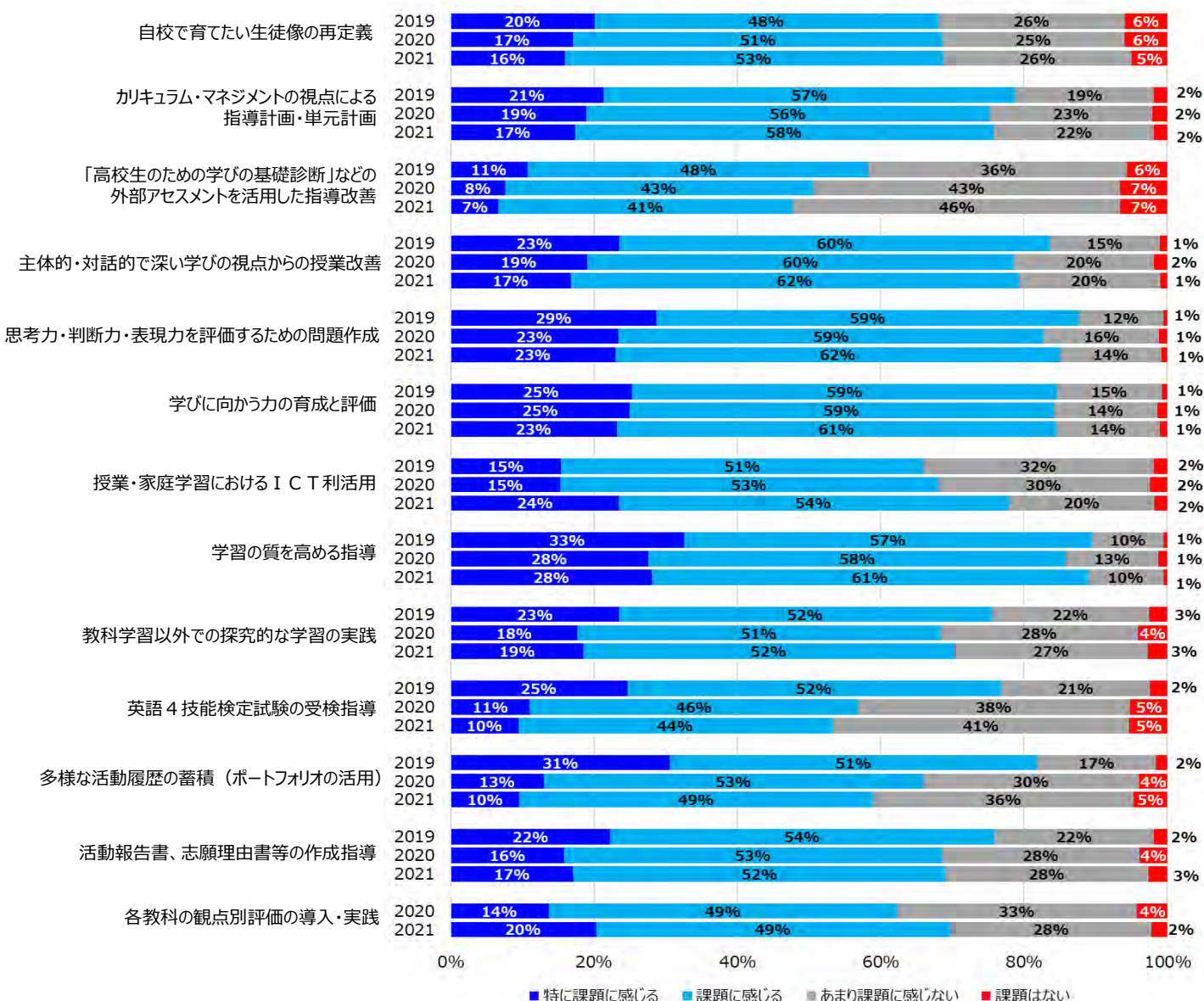
学習の質の向上、ICT活用、観点別評価に対する課題感が強い

「特に課題に感じる」の回答率が最も高かったのは、2020年度に続いて「学習の質を高める指導（28%）」であった。「組織的な取り組み」+「多くの先生の取り組み」の回答率は増加しており、取り組みは進んできているものの依然として課題感が大きいとみられる。

2020年度から追加した「各教科の観点別評価の導入・実践」については取り組み状況はほとんど変化がない一方で、課題に感じるという回答は増加している。これは他の項目にはみられていない特徴であり、観点別評価の取り組みには課題がとりわけ高いものとみられる。

※新課程に向けた対応のうち、観点別評価の導入・実践についてはどのように取り組みを進めてよいかわからないといった声も多く伺います。観点別評価について弊社でWEBセミナーを実施しており、本誌20ページにダイジェストリポート「学習評価の充実に向けてすべきこと」を掲載しているため、こちらをご参考にしてください。

教育・入試改革に向けた課題感



※年度によって質問項目が一部異なる場合がある。

（例：「高校生のための学びの基礎診断」が「高等学校基礎学力テスト」となっていた、など）

※ 2021年度は1,024校、2020年度は1,060校、2019年度は1,400校より回答をいただいた。

3-1. 大学入学共通テスト 結果に対する認識

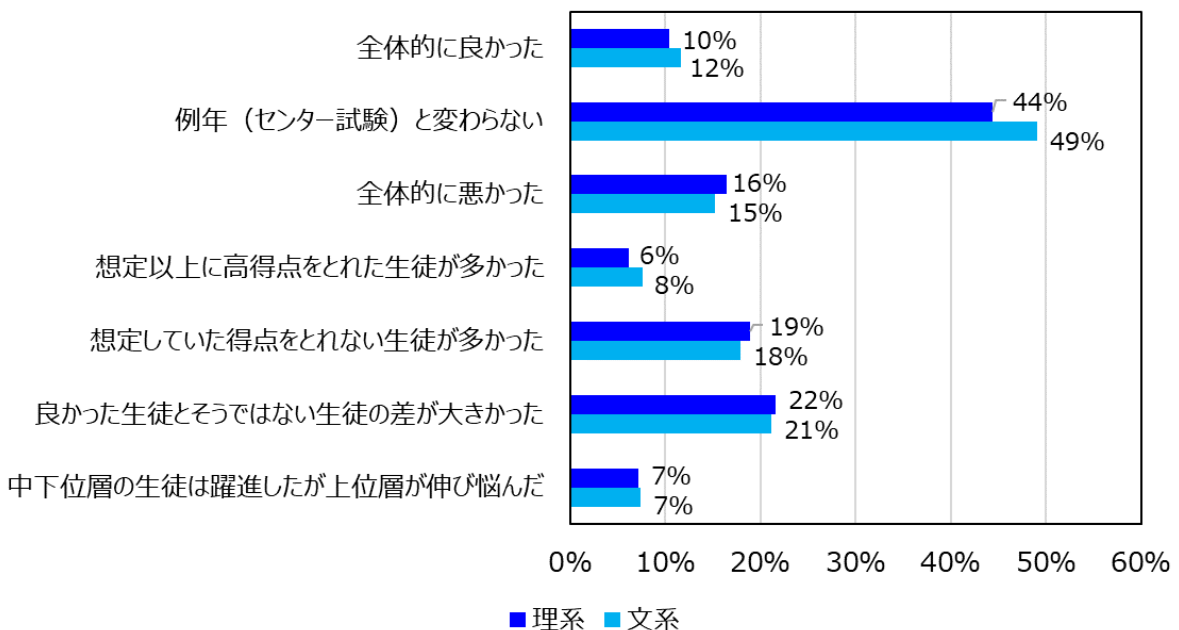
導入初年度の共通テストは難化しなかったこともあり、半数近くが例年どおりの結果という認識だった

文系型・理系型のそれぞれについて、共通テストの結果についての認識を尋ねたところ、「全体的に良かった」と回答した学校は文系で12%、理系で10%となった。また、「例年（センター試験）と変わらない」という学校は文系で49%、理系で44%となり、「全体的に悪かった」という学校は文系で15%、理系で16%となった。事前の難化予想に反して、平均点が上昇したこともあり、約半数が前年と変わらないと回答する結果となった。

しかし、「想定していた得点をとれない生徒が多かった」という学校は文系で18%、理系で19%となっており、生徒一人ひとりに目を向けると例年どおりとはいえない場合も多かったとみられる。また、「良かった生徒とそうではない生徒の差が大きかった」と回答した学校は文系で21%、理系で22%となっており、生徒間のばらつきは大きかったものと考えられる。

全体的には良かった学校が1割程度、例年と変わらないという学校が半数程度、悪かったという学校が15%程度あるが、想定していた得点をとれない生徒は比較的多く、生徒間の差もひろがったものとみられる。フリーアンサーでは「臨時休業中の学習状況で差がついた」、「その差をその後も埋めることができないまま共通テストを迎えた」といった声があがっており、自学自習ができる生徒、いわゆる自走化できる生徒とそうではない生徒の差が顕著にみられた入試でもあったといえそう。

共通テストの結果に対する認識



※数値は共通テスト受験者がいると回答した学校（939校）に対する割合。

フリーアンサーより抜粋

● コロナ禍で、自学自習ができる生徒とできない生徒の差が出た。教員と生徒、生徒間の情報交換が少なく意欲が出にくかった。

● コロナ禍の4・5月の休校の影響で、学習に不安を感じ、今まで以上に学習に励んだ生徒と着手しなかった生徒の差が大きかった。

● コロナウイルス感染拡大のため休校となった期間に、自学自習できた生徒とそうでなかった生徒の差が埋まらないまま共通テスト当日を迎えたため。

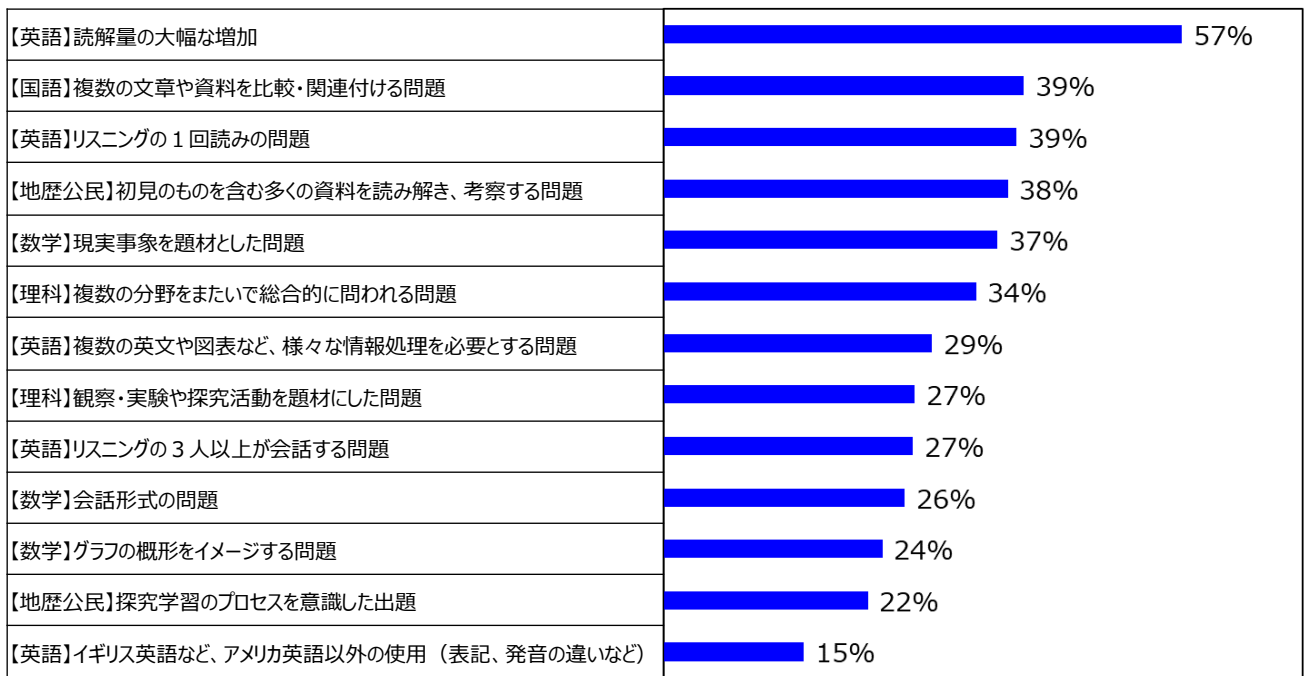
3-2. 大学入学共通テスト 今後の対応が必要な問題

英語の読解量の増加に対する課題感が最も大きい

共通テストではセンター試験と異なる様々な出題がなされたが、それらについて特に今後の対応が必要だと感じる問題・特徴は何かを尋ねた。最も課題感が高かったのは「【英語】読解量の大幅な増加（57%）」であった。2021年度の共通テストと2020年度のセンター試験を比較すると、語数はリーディングで約1.50倍、リスニングで約1.36倍となっており、大幅な増加となった。弊社、進研ゼミの会員を対象としたアンケートでも「時間が足りない」といった声が非常に多くあり、これまで以上に「時間」を意識する必要があると考えられる。

また、「【国語】複数の文章や資料を比較・関連付ける問題（39%）」、「【地歴公民】初見のものを含む多くの資料を読み解き、考察する問題（38%）」など、資料の読解に関する項目も上位に挙げた。フリーアンサーでもみても情報処理能力、読み取る力、といった読解に関するキーワードが英語に限らず多くの教科でみられており、読解力をいかに高めていくかが今後の課題となりそうである。

特に今後の対応が必要だと感じる問題



0% 20% 40% 60%

※数値は共通テスト受験者がいると回答した学校（939校）に対する割合。

センター試験と共通テストの英語の語数の比較

	センター試験 (2020年)	共通テスト (2021年)	増減
リーディング (本文の語数)	約2,800語	約4,200語	約1.50倍
リスニング (放送される英語)	約1,100語	約1,500語	約1.36倍

フリーアンサーより抜粋

● とにかく情報処理能力を高めること、何が問われているかを意識すること。必要な情報が、そうでないかを早く見極めること。

● 情報処理能力に長けた生徒は例年以上の得点であったため、全体にその力をつけさせることが必要と感じた。

● ルール文を正しく読む、情報の重みづけをしながら概要を把握する、などの「読みとる力」の育成が急務。また、情報をもとに段階を踏んで考える力の育成が課題。探究活動の充実を図りたい。

3-3. 大学入学共通テスト 想定以上に得点できた生徒の特徴

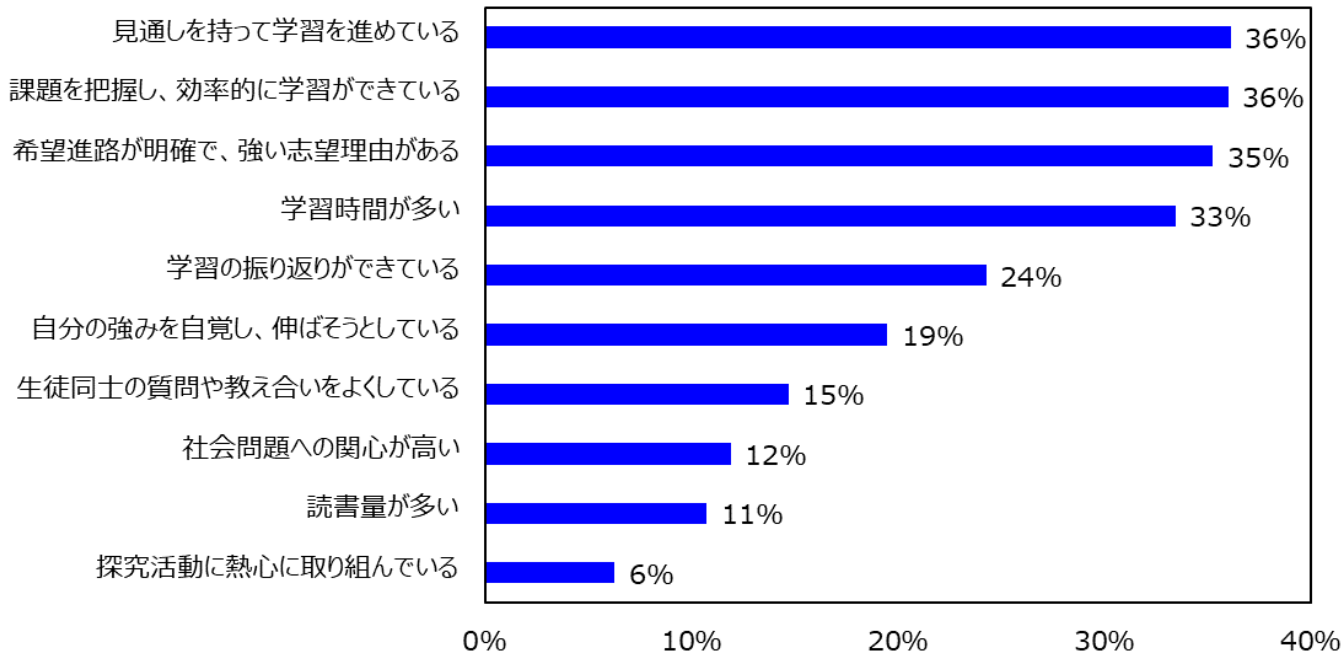
学習マネジメント力の養成や志望理由の明確化が良い結果につながるポイントとみられる

また、想定よりも高得点が取れた生徒の特徴を尋ねた質問では、「見通しを持って学習を進めている（36%）」、「課題を把握し、効率的に学習ができている（36%）」、「希望進路が明確で、強い志望理由がある（35%）」といった項目が上位に挙げられた。これら3項目は「学習時間が多い（33%）」というイメージしやすい項目よりも回答率が高くなった。

4ページで述べたように、新型コロナウイルス等の影響によって、自走化できる生徒とそうではない生徒の差が顕著にみられた入試となったことから、学習マネジメント力が良い結果を出すことにつながったものとみられる。また、2021年度入試はコロナ禍のなかで進路学習の機会が制限されることに加えて、新入試に対する不安感も重なり、例年以上に強い志望を持ち続けるのが難しい環境であったため、そのような環境下においても「希望進路が明確で、強い志望理由がある」生徒は共通テストでも良い結果を出したものとみられる。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響は現在もなお見通しがたない状況であり、学習マネジメント力の養成・自走化、志望理由の明確化といった観点が今後も重要になってくると考えられる。

共通テストで想定していたよりも高得点がとれた生徒の特徴



※数値は共通テスト受験者がいると回答した学校（939校）に対する割合。

3-4. 大学入学共通テスト 意識して行ってきた指導

英語リスニング、思考力・判断力・表現力への対応は多くの学校で実施

共通テストを意識して行ってきた指導について尋ねたところ、「英語リスニング指導の強化（44%）」が最も多く、次いで「定期テスト等で思考力を問う問題を増やす（35%）」が続いた。英語リスニングの重視、思考力・判断力・表現力の重視は共通テストの特徴であり、その対策は多くの学校でなされてきたものとみられる。

共通テストを意識して行ってきた指導

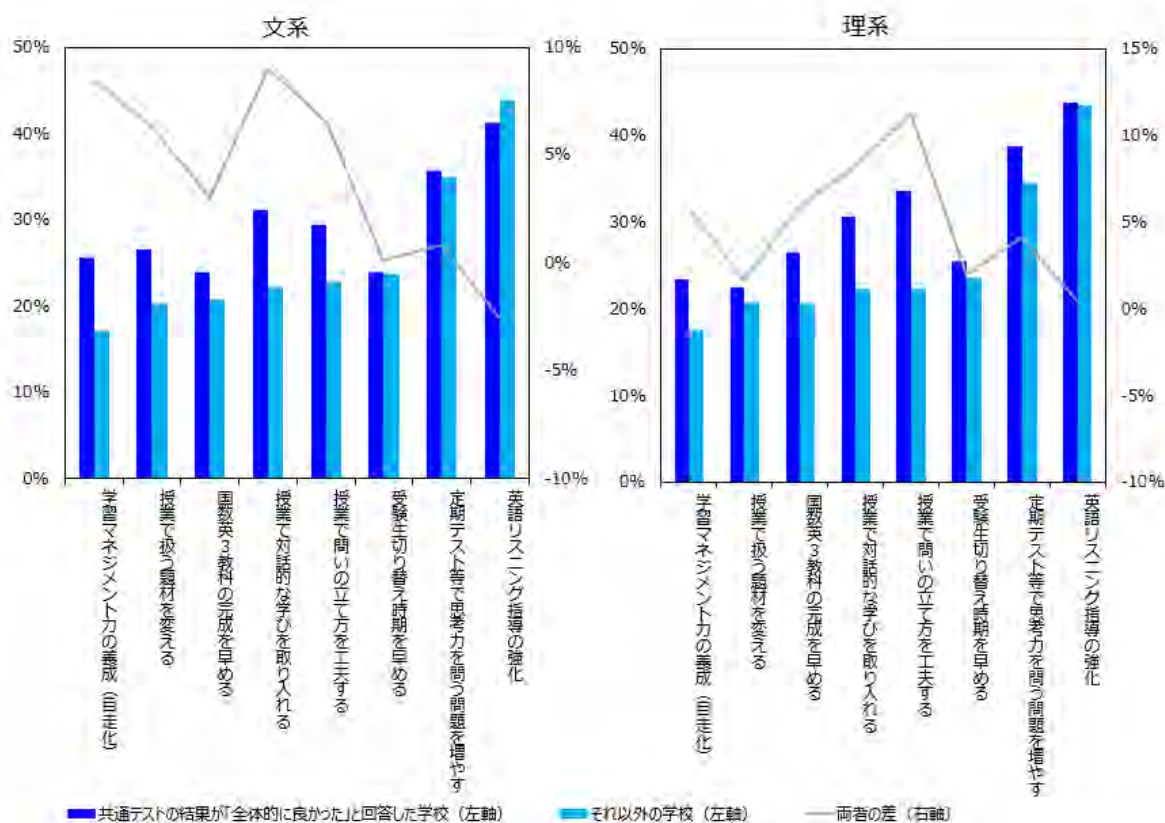


※数値は共通テスト受験者がいると回答した学校（939校）に対する割合。

共通テストの結果が良かった学校では学習マネジメント力の養成・授業改善の回答率が高い

一方で、共通テストの文系の結果が全体的に良かったと回答した学校と、それ以外の学校で比べてみると、「学習マネジメント力の養成、自走化」「授業で対話的な学びを取り入れる」といった項目で差がつく結果となった。フリーアンサーでは「共通テストに向けて、見通しを持って学習できる生徒はよいが、そうでない生徒に対して学習の方向性・指針をより明確に示すことが必要だったと感じます」といった回答もみられ、生徒の学習マネジメント力を高める取り組みが共通テストの結果につながったと考えられる。また、特に理系では授業改善の取り組みで最も差がついているようだ。

共通テストの結果認識別の行ってきた指導



※「共通テストの結果が「全体的に良かった」と回答した学校」は文系で109校、理系で98校、「それ以外の学校」は文系で830校、理系で841校。

4-1. 学習の質を高める指導

学習の振り返りや学習方法のオリエンテーションを実施している学校が多い

3ページの教育・入試改革に向けた課題感を尋ねた質問では「特に課題に感じる」の回答率が最も高かった項目は、2020年度に続いて「学習の質を高める指導」であった。そこで学習の質を高める指導の取り組みを具体的に尋ねたところ、「学習の振り返りの強化（45%）」に取り組んでいる学校が最も多く、次いで「学習方法のオリエンテーションの実施（38%）」「面談の質・量の充実（31%）」と続いた。

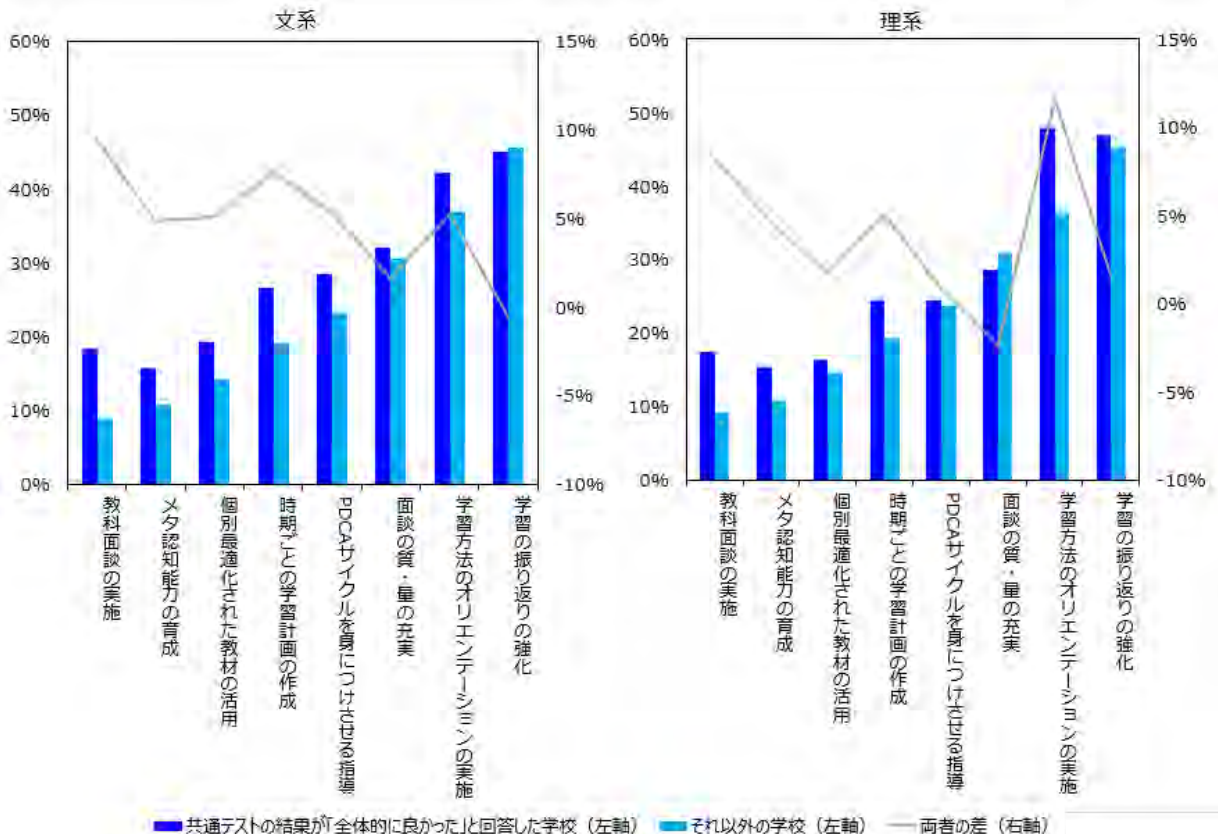


※数値は調査の有効回収数（1,024校）に対する割合。

教科面談や学習計画の作成、学習方法の指導などは共通テストの結果にもつながるとみられる

共通テストの文系の結果が全体的に良かったと回答した学校と、それ以外の学校で比べてみると、「教科面談の実施」「時期ごとの学習計画の作成」「学習方法のオリエンテーションの実施」などを行っている学校では共通テストの結果が良かったと回答している割合が高くなった。これらの指導による学習の質の向上は共通テストの結果にもつながっていると考えられる。

共通テストの結果認識別の学習の質を高める指導



※「共通テストの結果が「全体的に良かった」と回答した学校」は文系で1,024校、理系で1,024校、「それ以外の学校」は文系で830校、理系で841校。

4-2. 生徒の学習に関する課題

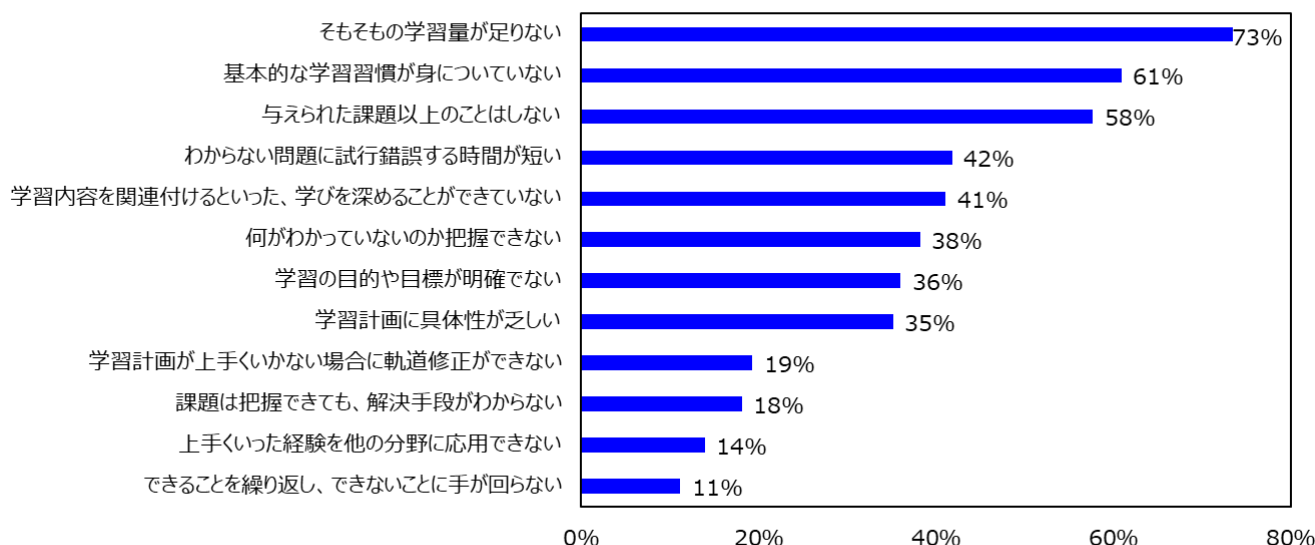
学習習慣・学習の量に対する課題が最も多い

一方で模試の平均偏差値が高い学校群ではどのように学習するかといった課題感が高まる

生徒の学習に関して課題に感じていることを尋ねたところ、「そもそもの学習量が足りない（73%）」「基本的な学習習慣が身につけていない（61%）」「与えられた課題以上のことはしない（58%）」といった項目が上位に挙がった。

ベネッセ総合学力テスト1年生7月の国数英総合の学校平均偏差値（受験者数30人以上の学校のみ集計）の結果別にみると、偏差値55以上の層では「与えられた課題以上のことはしない」の回答数が最も多く、次いで「わからない問題に試行錯誤する時間が短い」が挙がった。「何がわかっていないのか把握できない」「学習計画に具体性が乏しい」は平均偏差値60以上の学校では課題感が小さいが、60未満の学校ではいずれも課題感が中程度となっている。一方、平均偏差値が高いほど課題感が高くなる項目は「学習計画が上手くいかない場合に軌道修正ができない」「課題は把握できても、解決手段がわからない」などである。学習量や学習習慣の課題が少ない学校群では、どのように学習するかといった内容の課題感が相対的に高まるとみられる。

生徒の学習に関する課題



※数値は調査の有効回収数（1,024校）に対する割合。

学習における生徒の課題（平均偏差値別）

	2020年度ベネッセ総合学力テスト・1年7月の学校平均偏差値（国数英総合）				
	60以上	55以上60未満	50以上55未満	45以上50未満	45未満
できることを繰り返し、できないことに手が回らない	10%	6%	19%	13%	6%
上手くいった経験を他の分野に応用できない	10%	18%	16%	10%	10%
課題は把握できても、解決手段がわからない	20%	18%	17%	16%	15%
学習計画が上手くいかない場合に軌道修正ができない	29%	29%	20%	21%	15%
学習計画に具体性が乏しい	19%	35%	32%	44%	30%
学習の目的や目標が明確でない	20%	32%	27%	38%	32%
何がわかっていないのか把握できない	15%	31%	29%	37%	40%
学習内容を関連付けるといった、学びを深めることができていない	36%	50%	39%	40%	38%
わからない問題に試行錯誤する時間が短い	39%	51%	40%	40%	35%
与えられた課題以上のことはしない	46%	51%	56%	59%	53%
基本的な学習習慣が身につけていない	20%	43%	53%	53%	68%
そもそもの学習量が足りない	36%	46%	72%	72%	75%

※アンケートに回答いただいた学校のうち、2020年度ベネッセ総合学力テスト・1年7月を30人以上受験いただいた学校のみを集計。

※数値は各偏差値帯の学校群の有効回答数に対する割合。

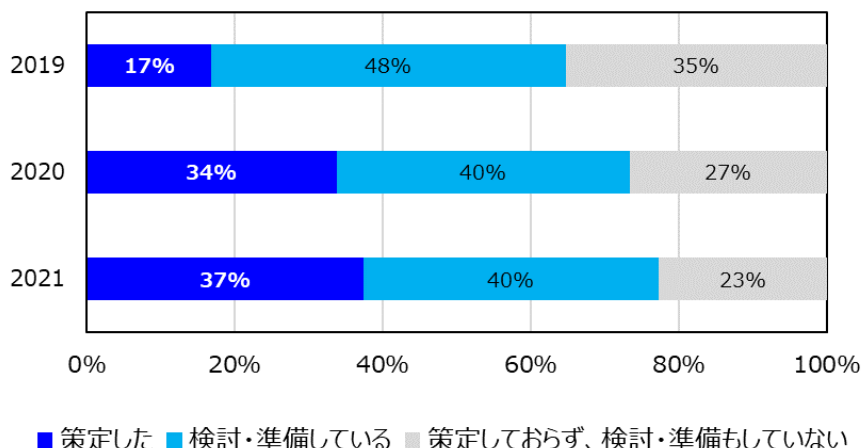
※60以上は59校、55以上60未満は68校、50以上55未満は102校、45以上50未満は156校、45未満は179校。

5. カリキュラム・マネジメントの取り組み状況

7割以上の学校で「育てたい資質・能力の策定」に向けた動きがある

カリキュラム・マネジメントに向けた取り組みとして、学校の教育目標を資質・能力ベースで策定することについて尋ねたところ、「策定した」が37%、「検討・準備している」が40%となっており、両者を合わせると8割近い学校で「育てたい資質・能力の策定」に向けた動きが進んでいることがわかる。3カ年で比較しても徐々に取り組んでいる割合は増加してきている。

「育てたい資質・能力」の形での学校教育目標の策定

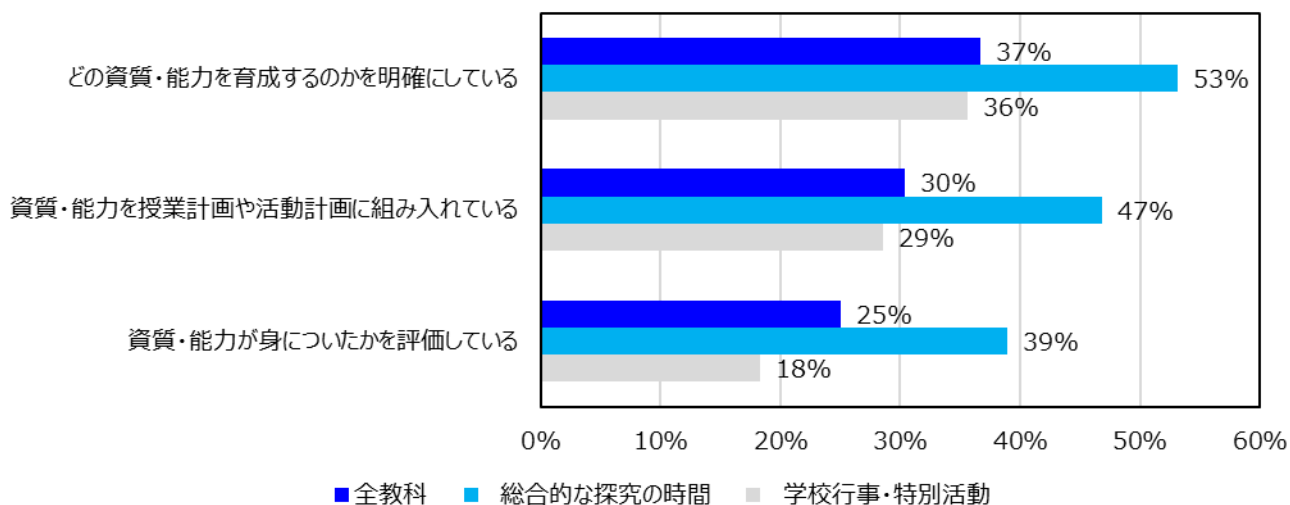


※数値は調査の有効回収数（2021年度は1,024校、2020年度は1,060校、2019年度は1,400校）に対する割合。

一方で、「資質・能力の評価」までは取り組めていない学校が多い

「資質・能力の策定」が進んでいる一方で、その評価までは取り組めていない傾向は継続している。「『育てたい資質・能力』を教科の指導の中に紐づけていますか」という質問では、どの資質・能力を育成するかという目標設定までは多くの学校でできているものの、その資質・能力が身についたか評価しているという学校は比較的少なくなっている。昨年度と同様の傾向となっており、資質・能力の設定から評価まで、学校全体で一貫した取り組みまで行っている学校は少なく、その推進には依然として課題があるものと考えられる。

育てたい資質・能力の設定と指導への反映状況



※数値は調査の有効回収数（1,024校）に対する割合。

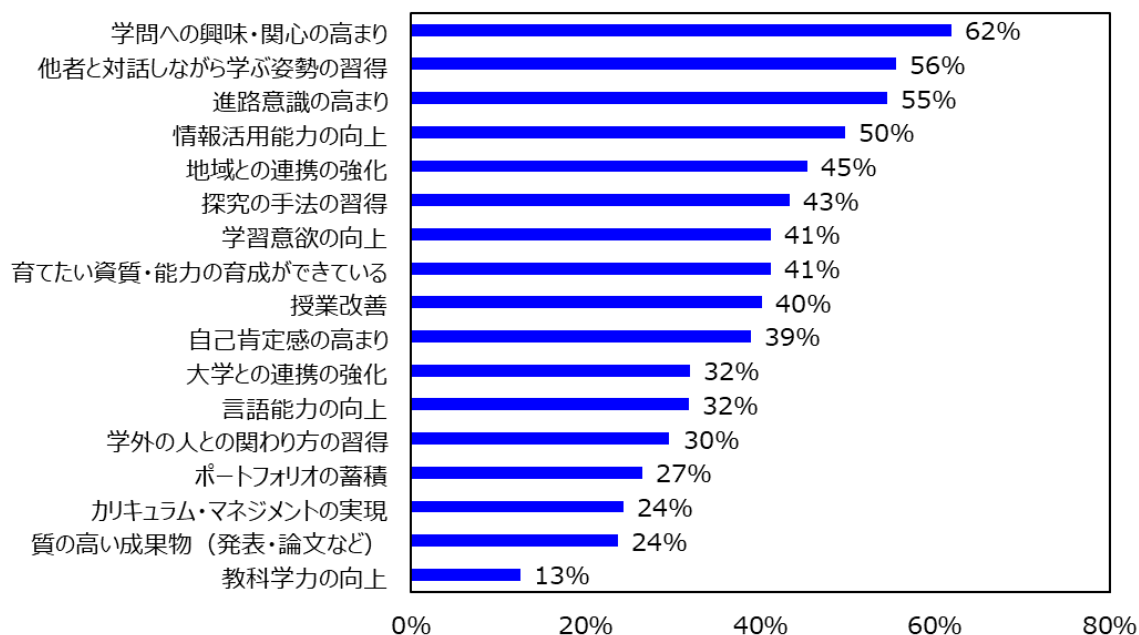
6. 探究 取り組み状況・期待と実感

進路意識の高まりや他者対話しながら学ぶ姿勢の習得について、期待・実感している割合が高い

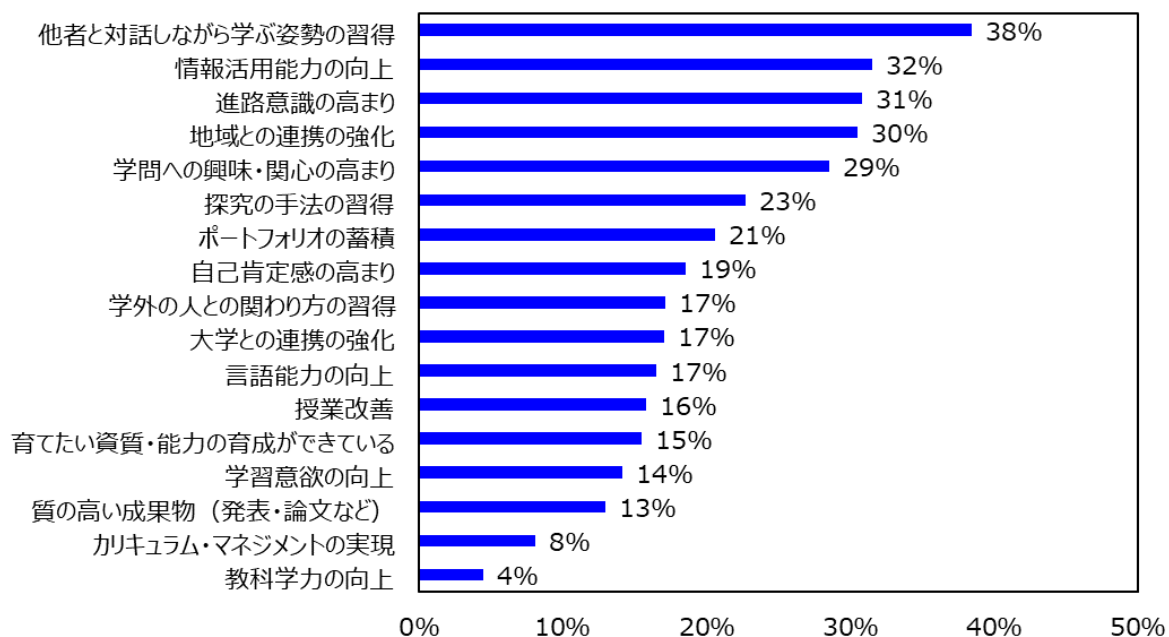
探究についての取り組み状況を尋ねたところ、「新型コロナ等の影響で想定どおりの探究学習ができていない」と回答した学校は51%と半数を超えた。一方で「ICTの活用等で想定通りの探究学習ができています」という学校も23%みられた。

探究活動の効果について期待と実感について尋ねたところ、期待については「学問への興味・関心の高まり（62%）」が最も高く、「他者対話しながら学ぶ姿勢の習得（56%）」「進路意識の高まり（55%）」が続いた。一方で、実感については「他者対話しながら学ぶ姿勢の習得（38%）」が最も高く、「情報活用能力の向上（32%）」「進路意識の高まり（31%）」が続いた。期待が最も高かった「学問への興味・関心の高まり」は実感しているという回答が29%にとどまり、期待の高さに対して効果を実感している割合が低い結果となった。

探究の効果として**期待**していること



探究の効果として**実感**していること



※数値は有効回答数（1,024校）に対する割合。

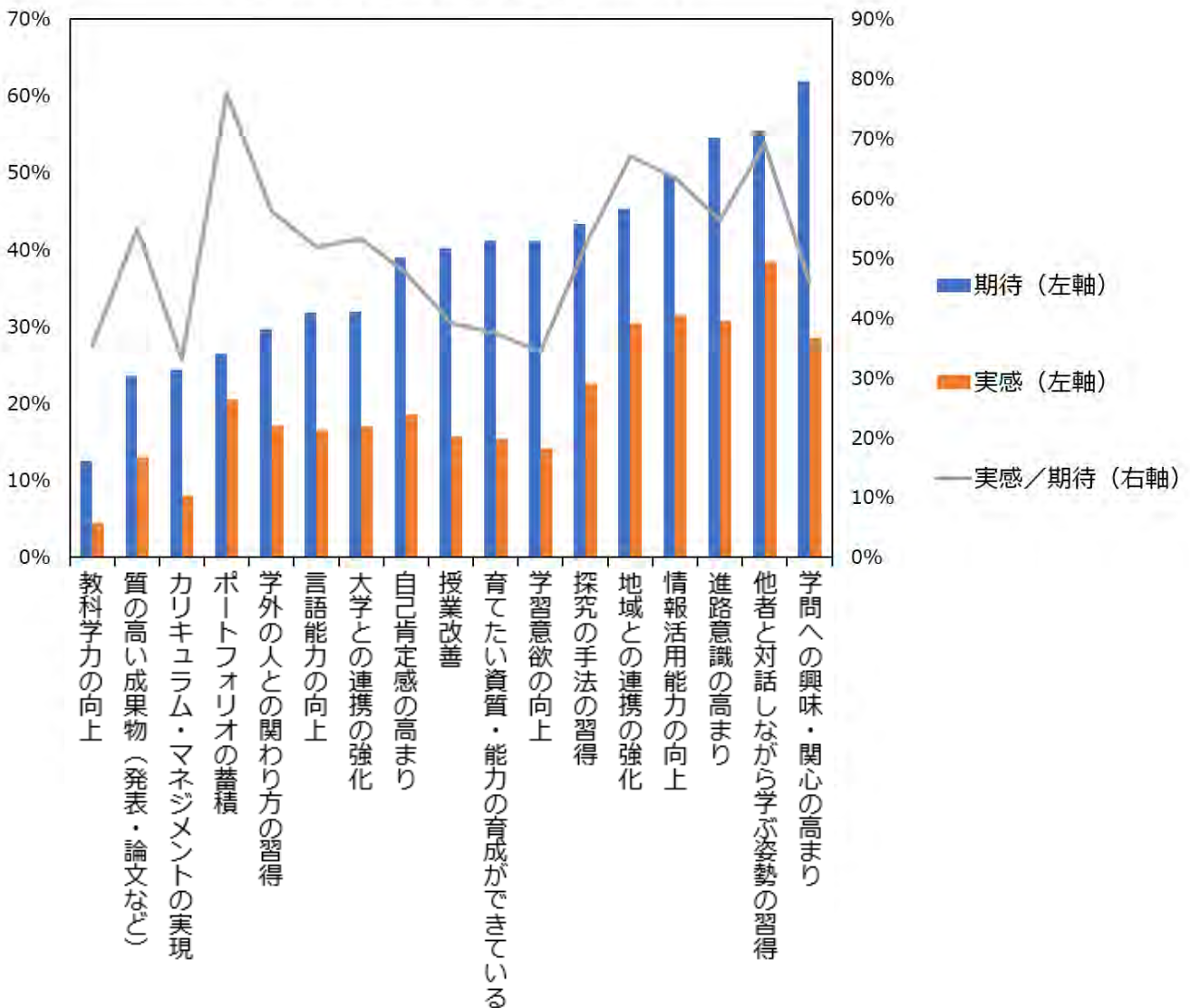
学習意欲の向上や授業改善などでは期待と実感のギャップが大きい

期待と実感のギャップに注目すると、ギャップが大きい項目は「学問への興味・関心の高まり」「学習意欲の向上」「育てたい資質・能力の育成ができていない」「授業改善」などであった。

教科の中でも探究的な観点を取り入れて学習意欲の向上や授業改善につなげたいという期待はあるものの、実感にはつながっていないものとみられる。フリーアンサーでは「探究と各教科、進路とのつながりが弱い。内容が深まっていない」といった声もみられ、総合的な探究の時間における探究は進んでいても、授業の中での探究活動についてはあまり進んでいないといったケースも多いものと考えられる。

※探究については弊社でWEBセミナーを実施しており、本誌24ページにダイジェストレポート「生徒のやりたい！を引き出す『探究的な学び』実践の第一歩」を掲載しているため、こちらもご参考にしてください。

探究の効果についての期待と実感のギャップ



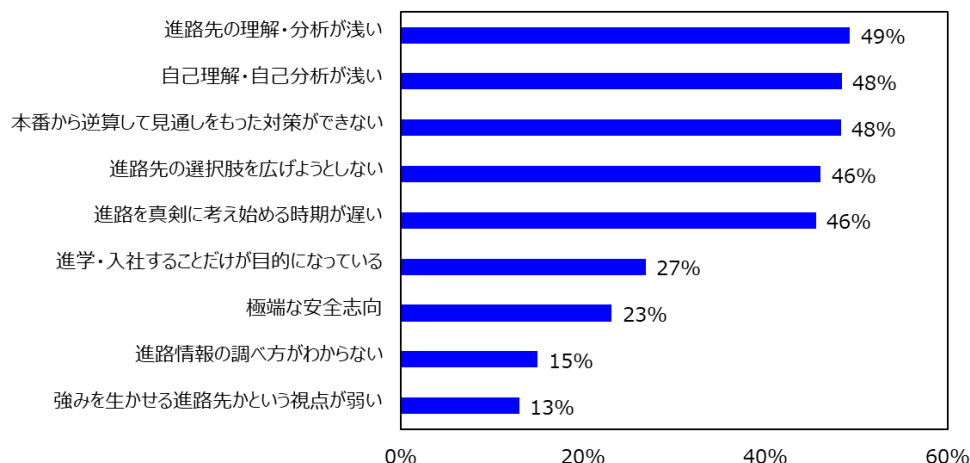
※数値は有効回答数(1,024校)に対する割合。

7-1. 進路指導の状況

進学先の理解・分析、自己理解・自己分析のいずれも半数近い学校が課題に感じている

進路指導における生徒の課題感について尋ねたところ、「進学先の理解・分析が浅い（49%）」「自己理解・自己分析が浅い（48%）」、「本番から逆算して見通しをもった対策ができない（48%）」といった項目が上位に挙がり、半数近い学校で課題となっているという回答が得られた。

進路指導における生徒の課題



※数値は有効回答数（1,024校）に対する割合。

平均偏差値60以上の学校では自己理解に対する課題感が比較的高い

2020年度ベネッセ総合学力テスト・1年7月の学校平均偏差値別にみると、平均偏差値60以上の学校群では、全体的に進路指導についての課題感はいささか小さい傾向がみられる。最も回答率が高い項目は「自己理解・自己分析が浅い（41%）」であり、他の学校群と比べて「強みを生かせる進路先かという視点が弱い（24%）」が比較的高い回答率となった。一方で、進学先の理解・分析についての課題感はいささか低く、特に自己分析・自己と進学先の接続に課題が大きいものとみられる。

平均偏差値55以上60未満の学校群では「進学先の選択肢を広げようとしていない（54%）」の回答率が最も高くなった。また、他の学校群と比べて「進学・入社することだけが目的となっている（31%）」が比較的高い回答率となった。「自己理解・自己分析が浅い（51%）」の回答率が最も高いのもこの学校群であり、進学・就職後にやりたいことを明確に描けないことが、進路選択の視野が狭いことにつながっている可能性が考えられる。

平均偏差値50未満の学校群では「極端な安全志向」の回答率が比較的高い傾向を示した。

進路指導における生徒の課題（平均偏差値別）

	2020年度ベネッセ総合学力テスト・1年7月の学校平均偏差値（国数英総合）				
	60以上	55以上60未満	50以上55未満	45以上50未満	45未満
強みを生かせる進路先かという視点が弱い	24%	15%	18%	10%	9%
進路情報の調べ方がわからない	8%	7%	16%	8%	14%
極端な安全志向	10%	21%	23%	29%	28%
進学・入社することだけが目的になっている	22%	31%	19%	24%	31%
進路を真剣に考え始める時期が遅い	27%	35%	47%	49%	47%
進学先の選択肢を広げようとしていない	36%	54%	44%	47%	46%
本番から逆算して見通しをもった対策ができない	39%	49%	49%	52%	46%
自己理解・自己分析が浅い	41%	51%	50%	45%	46%
進学先の理解・分析が浅い	34%	47%	49%	47%	47%

※アンケートに回答いただいた学校のうち、2020年度ベネッセ総合学力テスト・1年7月を30人以上受験いただいた学校のみを集計。

※数値は各偏差値帯の学校群の有効回答数に対する割合。

※60以上は59校、55以上60未満は68校、50以上55未満は102校、45以上50未満は156校、45未満は179校。

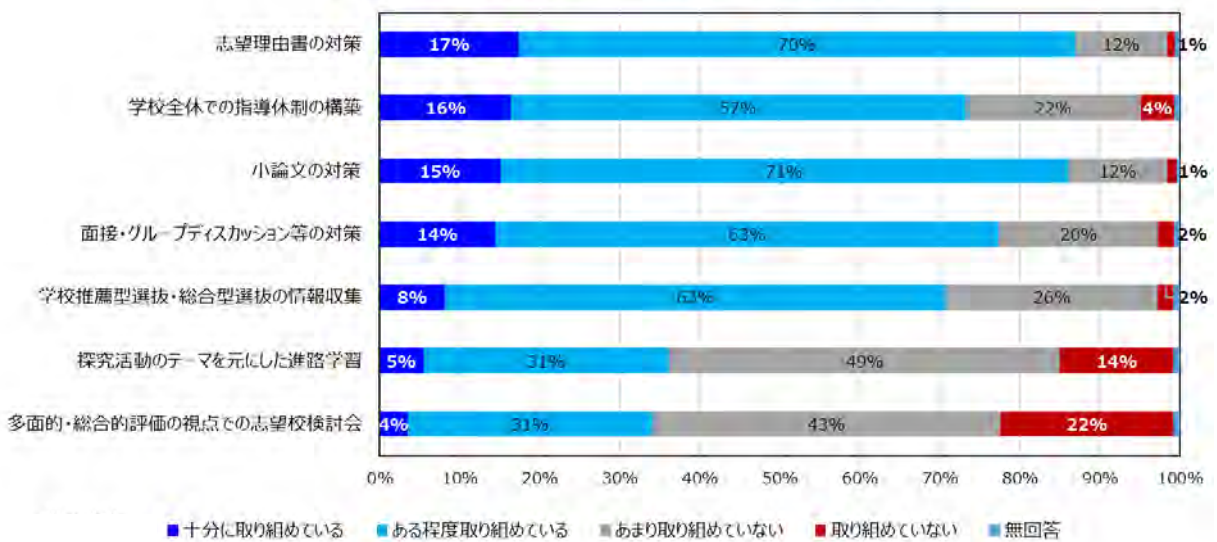
7-2. 学校推薦型・総合型選抜の指導

学校推薦型・総合型選抜の拡大にともない、学校全体での指導体制の構築が求められる

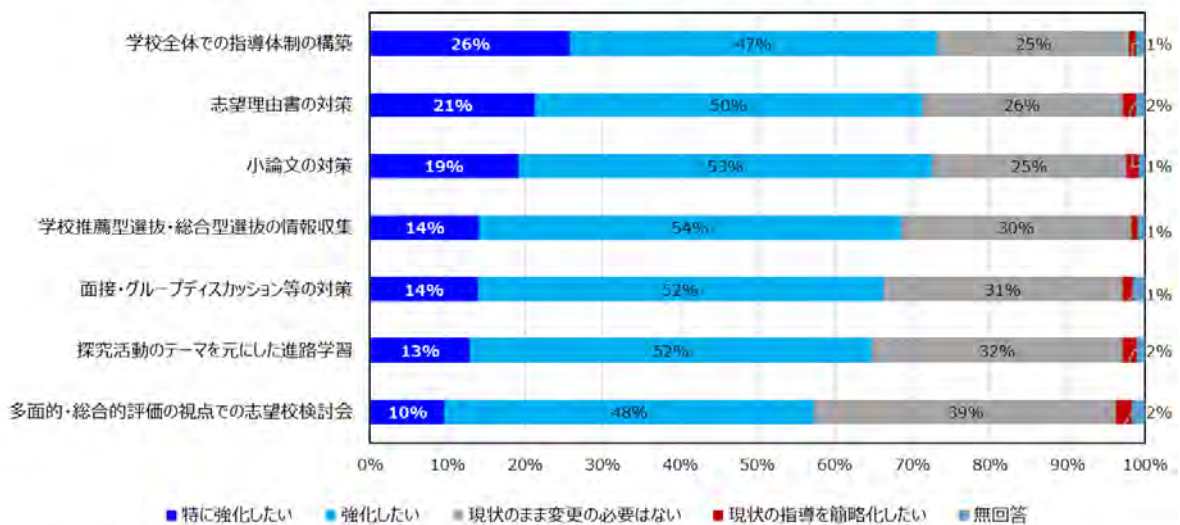
学校推薦型選抜、総合型選抜の指導の取り組み状況について尋ねたところ、志望理由書や小論文、面接等の対策に「ある程度取り組んでいる」という学校が大半ではあるものの、「十分にに取り組んでいる」という学校はいずれも2割以下となった。

また、今後力を入れて取り組みたいことを尋ねたところ、「学校全体での指導体制の構築」を「特に強化したい」という回答が最も多くなった。総合型選抜や学校推薦型選抜の枠が拡大し、志望者も増加する中で組織的な対応が必要だという認識が強いとみられる。

「学校推薦型選抜」「総合型選抜」の指導の取り組み状況



「学校推薦型選抜」「総合型選抜」の指導における今後力を入れて取り組みたいこと



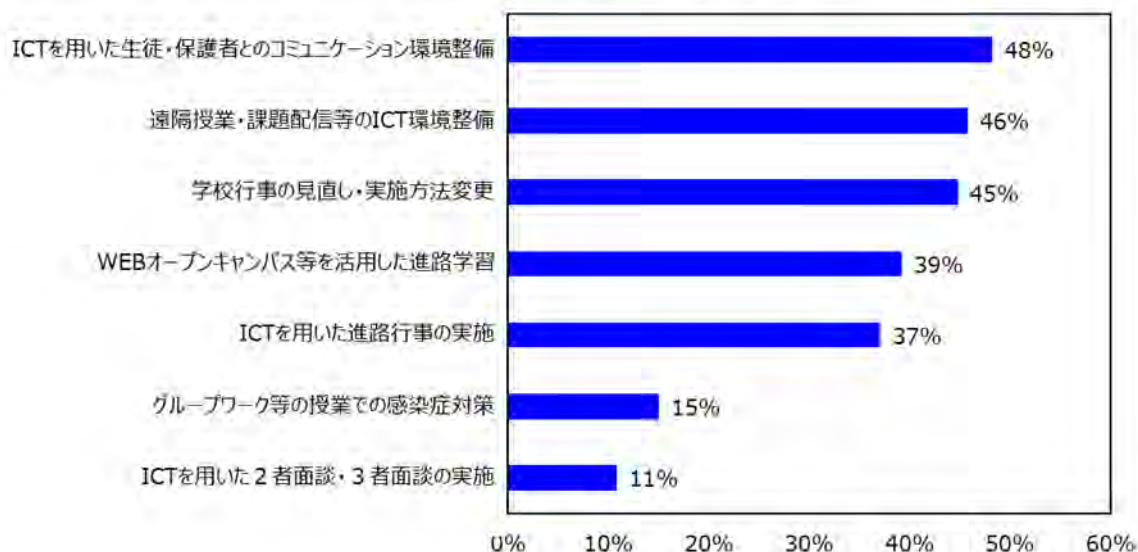
※数値は有効回答数（1,024校）に対する割合。

8. 新型コロナウイルス感染症への対応

新型コロナ対応としてICT活用が進むが、同様に課題感も高まっている

新型コロナウイルスに対する今後の対応の検討状況について尋ねたところ、「ICTを用いた生徒・保護者とのコミュニケーション環境整備（48%）」「遠隔授業・課題配信等のICT環境整備（46%）」など、ICTの活用に関する項目が上位に挙がった。一方で、フリーアンサーには「ICTを活用した指導は令和2年度で実施済みであるので、『その合理化』を図りたい」といった声もあり、本誌2ページ目でも述べたようにICT活用が進む中で新たな課題も生じてきており、その対応が求められているとみられる。また、「学校行事の見直し・実施方法変更（45%）」も高い回答率となっている。

新型コロナウイルスについて次年度以降に対応を検討していること

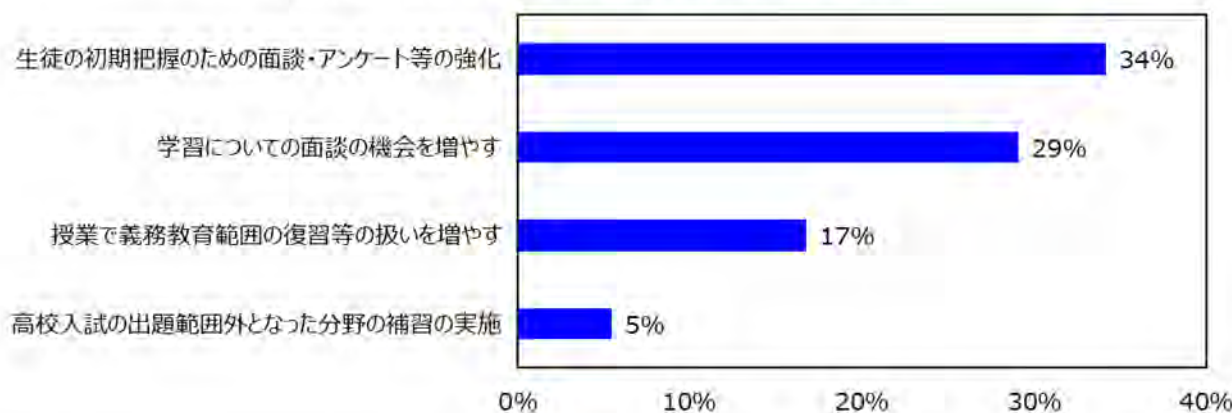


※数値は有効回答数（1,024校）に対する割合。

2021年度入学生に対しては面談の機会を増やす取り組みを多くの学校が行ったとみられる

2021年度入学生では、臨時休業や高校入試での出題範囲が限定されたことなどの影響で、例年よりも学習面で不安を抱えた生徒が多いと考えられるが、その対応について尋ねたところ、約3割の学校で「生徒の初期把握のための面談・アンケート等の強化」、「学習についての面談の機会を増やす」といった取り組みを予定しているという回答が得られた。

2021年度入学生の臨時休業等による学習不安への対応



※数値は有効回答数（1,024校）に対する割合。

新入試1期生 総括セミナー

～躍進校から学ぶ指導ポイントとは～

大学入試改革が進む現在、生徒の資質・能力を高めて合格に導くためには、こういった教科指導・進路指導が有効なのでしょうか。2021年5月、2日間にわたって開かれたオンラインセミナーでは、新入試初年度となった2021年度入試において、合格実績が躍進した学校の指導ポイントをお伝えしました。今回は1日目に行われた、水海道第一高等学校の発表をレポートします。

本セミナー全体のアーカイブ動画・資料は

Benesse High School Online
高校の先生の課題解決をサポートする情報サイト

からご視聴いただけます。

① TOPページ (<https://bhso.benesse.ne.jp/>) にログイン

② 入試 > 2022年度入試 > 2021年度入試結果 > 第1回出願指導 WEB 研究会

③ ページ左上にある  こちらのバナーをクリック

学校ID/ログインコードをお忘れの際は下記までご連絡ください。

0120-350124 WEBサポートデスク (通話無料) 受付時間/月～金 8:00～18:00 土 8:00～17:00 ※祝日、年末・年始を除く

DAY1 ご講演レポート

一般選抜をメインに見据えた3年間の進路指導ストーリーを学ぶ

茨城県立水海道第一高校

2020年度 3学年主任

菅原冬樹 先生



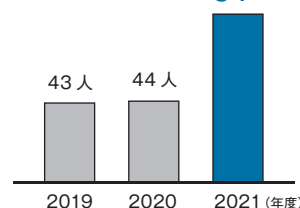
創立121年目。進学重視型単位制高校。1学年7クラス280人。ハンドボール部・陸上部などが関東大会出場。2021年度入試における合格者数は、国公立大で前年度比207%、私立大で同116%と躍進。

合格実績 (令和3年度)

【国公立大 91人】 北海道大 (1)、筑波大 (10)、茨城大 (26)、埼玉大 (9)、千葉大 (2)、金沢大 (2)、東京都立大 (2)、県立医療大 (5) など

【私立大 のべ655人】 早稲田大 (11)、慶應義塾大 (2)、上智大 (5)、東京理科大 (10)、明治大 (15)、青山学院大 (3)、立教大 (8)、中央大 (12) など

国公立大合格者数 91人



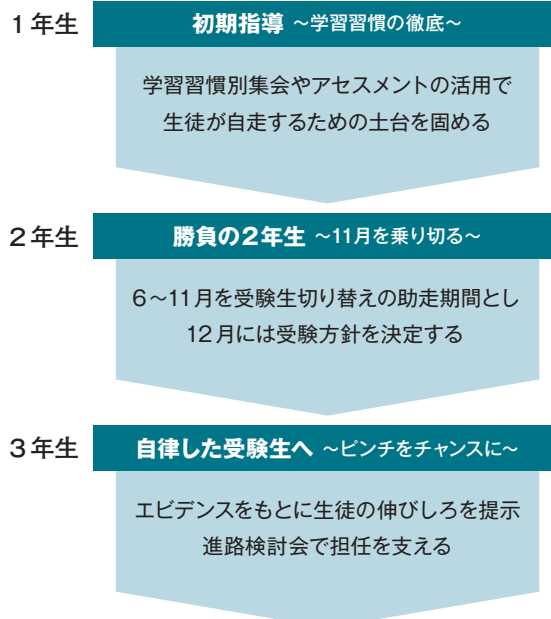
学年経営

3年間の体系化された指導の必要性

私が赴任してきた2017年度の本校には、個々の教員は意欲的に進路指導に取り組んでいるものの、全体としての方向性に欠けているという課題がありました。各教員の取り組みをバラバラの「点」ではなく、一貫性を持つ「線」にするためには、教員間のコンセンサスとなる進路指導プログラムが必要だと感じました。どの時期に、何を目的として、どのような指導を行うのか。3年間の設計図を組み立て、時期ごとの目標を明確にしました【図表1】。

プログラムを共有すると、教員団の進路指導に統一感がもたらされます。特に経験の浅い教員や新任者にとっては、具体的な指針の存在は心強いです。今、なぜその指導を行うのか、意義を皆で理解して実践に当たれば効果が高まりますし、また、その意義を生徒や保護者に伝えることにより、安心感や信頼感を得られます。教員間の目線がそろうため、団結力が生まれるのも大きなメリットです。

【図表1】3年間の指導の流れ (進路指導プログラムの流れ)



学年経営をスタートするにあたって

3年間の進路指導の大目標は、「一つ上」の集団にすること。3年進級時に、自律した受験生、プライド(自信)を持つ「個」になることをめざしました。進路指導の力の入れ具合を数字で表すなら、1年が5割、2年が4割、3年が1割。1・2年のうちに受験生としての土台を固めておき、3年の夏以降は教科・出願指導に集中することが理想です。

私が担当した2018年度の1年生は入試改革を迎える学年であったこともあり、3年間ではぐくみたい資質・能力を明示しました【図表2】。生徒にとってはこれが振り返りのものさしとなり、結果的に入試のポートフォリオ対策にもなります。振り返りの手段は、紙の記録を廃止してClassi

に移行し、教員の負担軽減を図りました。生徒が書いた文章を簡単に編集できる点を生かし、文章をピックアップして学年通信に掲載すると、生徒は他者の視点をより意識するようになり、振り返りの効果を高めることができました。

【図表2】3年間で育みたい資質・能力

① 自己肯定力 達成感を積み重ねて得られる自信	⑤ 思考力 鵜呑みにせず、「なぜか」を考える力
② 自己分析力 自分の力や生活を客観評価する力	⑥ 発信力 考えをわかりやすく他者に伝える力
③ 主体的実行力 具体的かつ主体的な行動をする力	⑦ 継続力 ポジティブな行動を継続させる力
④ 社会適応力 多様な社会を理解し適応する力	⑧ そうぞう力 未来を想像し、課題解決法を創造する力

1年生

1年次秋までに学習習慣の定着を図る

中学時代に家庭学習の習慣がなかった生徒、塾に頼りきりだった生徒は、高校での学びについていけません。そこで1年次は、秋までに学習習慣を定着させることを目標に初期指導を行います。端緒は、5月に行う学習習慣別集会です。4月に実施した第1回スタディーサポートの学習習慣の到達度ゾーン別(各ゾーン10～50人程度)に生徒を集め、昼休みに約15分の集会を実施。ゾーンごとに具体的なアドバイスを送り、予習→授業→復習のサイクル確立をめざします。学習到達ゾーン(GTZ)ではなく学習習慣の到達度ゾーンを基準にしたのは、この時期の学力はまだ受験勉強の貯金であるため、その後の成績の伸びを促すには、まず学習習慣の改善が必要であるためです。

以降は、定期テスト対策を軸に高校の学習に慣れさせていきます。定期テストの約1週間前は、放課後の自習時間「SFT(セルフスタディタイム)」を設置。生徒同士の学び合いや教員に質問しやすい雰囲気づくりを促し、学び合う集団を形成します。また定期テスト前の休日には希望者を募り「スタディマラソン」を開催。80分×6コマ＝8時間の自習を通し、勉強する体力と自信を養うイベントで、現在は1学年270人中約100人が参加するようになりました。

模試は1年次初回から積極活用

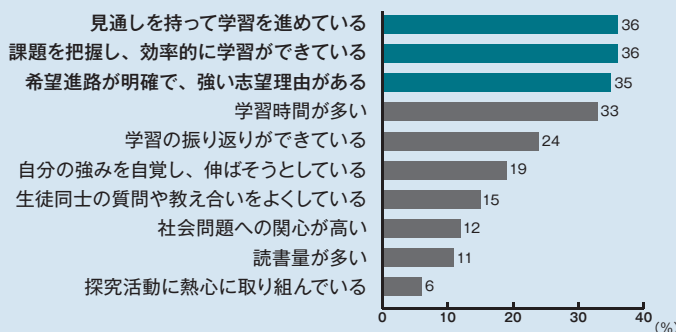
1年次から、模試を学習のマイルストーンとして積極的に活用する点も本校の特徴です。各模試にはキャッチフレーズ——例えば7月のベネッセ総合学力テストは「相手は、全国。」——をつけて学年全体で挑み、受験が団体戦であることを意識づけていきます。最初の模試から、生徒には根拠のある目標得点率を設定させます。具体的な数値目標の設定に必要な「偏差値を1上げるには1.5点必要」「GTZを1つ上げるには得点率5%アップが必要」といった感覚はすぐにはつかめないからです。

最初の模試の成績返却時に生徒には、「模試の結果をもとに、その後の学習戦略を立てること」「家庭学習の優先順位を、英語→数学→国語の順番にすること」を指示しました。この2点は高校の学習の基盤となる重要なポイントであるため、秋以降も教員から声をかけ続けました。さらに学習に飽きないように、放課後に未提出課題に取り組む「スタディファイトクラブ」、模試成績伸び率上位の生徒を表彰する「ジャンピングアップ大賞」など次々とイベントを打ち、ゲーム感覚で楽しく学べる雰囲気づくりを心がけました。

▶ 参考データ

共通テストで 想定より高い得点を とれた生徒の特徴

※ベネッセコーポレーション
「教育・入試改革対応に関する調査」
(2021年3月実施)



「学習時間が多い」を上回った3項目を見ると、学習マネジメント力と強い志望理由がカギであることがわかる。目標とする資質・能力を定めて定期的に振り返らせる同校の指導法は、生徒の学習マネジメント力を育成する手段の一つだと言えるだろう。

11月に「受験生になる」ために

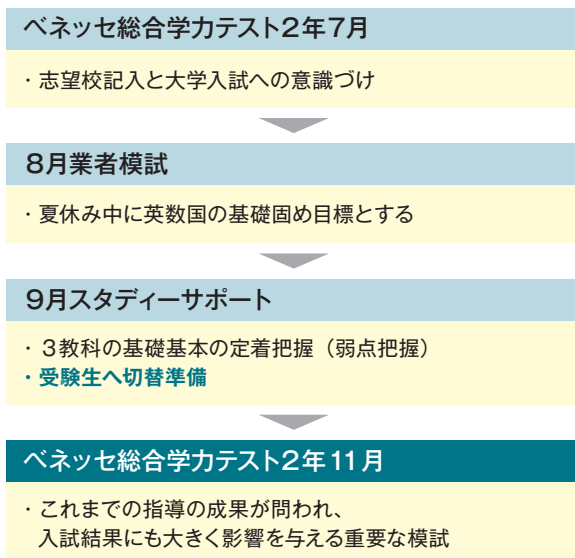
本校では2年生の11月に修学旅行があります。これを“受験生”に切り替わる節目ととらえ、6月の文化祭終了後から11月の修学旅行までの期間を、「受験生になるための助走期間」として位置づけました。

2年次においても、生徒、教員が時期ごとに目的意識を持つための中間目標として、模試を活用しています【図表3】。「受験生になるための助走期間」の前半にあたる6～8月は、英数国の基礎固めを徹底する時期。ベネッセ総合学力テスト2年7月は1学期中の基礎固めの進捗を測る機会として、8月業者模試は、気が緩みがちな夏休み期間中に基礎固めを完成させることを意識づける目標として、生徒・教員全員でその意義を共有しました。

期間中、最大の峠がベネッセ総合学力テスト2年11月です。受験生への切り替え時期であるとともに、それまでの指導を反映してよくも悪くも学力が大きく変化する時期であること、一般選抜で勝負できるかどうかの目安となるテストであることがその理由です。ここで結果を出すために、9月の2年第2回スタディーサポートの結果をもとに、GTZのゾーン別指導と生徒面談を行うこととしました。

一方で2年生中盤のこの時期は、1年次から取り組んできたことの成果が表れ始めた時期でもありました。アセスメントの受験を重ね、Classi等での振り返りを含むPDC Aを通して実力と自信をつけた生徒は、臆することなく難関大学を志望し、主体的に学習するようになりました。また先生方も、私が言わなくても率先して様々な学習イベントを企画・実践してくれました。先生方が本気だから、生徒も信じてついてきてくれたのだと思います。

【図表3】夏休み前後の指導の流れとねらい
(アセスメントの活用)



12月、一般選抜重視の方針を固める

2019年度の12月、次年度の受験戦略を検討するにあたって私たちは、前年度までの推薦・AO入試を広く活用する方針から、一般選抜に比重を置く方針への切り替えを決意しました。11月までのアセスメントの結果が好調であったこと、振り返りを蓄積してきた生徒たちに、安易に総合型・学校推薦型選抜を選択しない雰囲気が出ていたことなどが判断を後押ししました。この方針により、総合型・学校推薦型選抜を選択するのは、資質や強みを生かして本気で第一志望大に挑戦する生徒に絞られ、教員も彼らを集中的に指導することが可能になりました。

方針決定後は、大学入学共通テストにおける得点力をつけることを目的に、共通テスト早期対策模試を2回実施。生徒に「センター試験との違い」を理解させるとともに、生徒・教員の双方がその結果を、春休みに3年次の学習プランを検討するための素材として活用しました。

共通テスト重視の戦略は、国公立大の一般選抜を受験しない生徒にも、例外なく適用しています。私立大専願であっても、2年生の秋以降に5教科の学習を頑張り抜く経験は、新入試で問われる思考力・判断力を鍛えます。また新入試では総合型・学校推薦型選抜でも教科学力が重視されること、進学先での学びを充実させたいといった理由から、一般選抜型の学力をないがしろにできないと考えました。

進路検討会は1・2年次から少しずつ

1・2年次にかけての教員向けの活動として、“気軽な”進路検討会を折に触れて実施しています。前任校では、本格的な検討会を頻繁に実施していました。しかし、本校はまだ模試の結果を入試に結びつけるプロセスが熟しておらず、分析にあまり力を入れすぎると「成績下位の生徒は望みが薄い」という先入観を生む可能性があることから、他の会議の“ついで”に開くなど、簡易な形式での開催がメインです。

検討会では、模試とスタディーサポートの結果をそれまでの推移がわかるようにまとめ、学年全体の学力や学習習慣、成績上位者の志望大、成績不振者の状況を共有します。

1・2年次からこうした検討会を繰り返すことによる最大の効果が、教員の指導力の向上です。担任の先生にとっては、日頃の面談成果が問われる場となるほか、1人の生徒を複数の教員で分析することにより、担任だけでは気づかなかった指導ポイントをあぶり出すことができ、教科指導方針の修正の機会になります。2年次までに高められた進路検討の精度は、3年次の指導力に直結すると感じています。

臨時休業～夏休みは自走力を発揮

2020年度の3年生は、本校は3～5月の約3か月間が休校期間となりました。授業の補てんなどによって夏休みがなくなると踏んで、この期間を「受験の天王山」と銘打ち、1・2年次の不足部分を取り返すよう指導しました。教員陣は、希望者への面談、Classiによる授業動画や課題の配信、Zoomによる朝のホームルームを行うなど奮闘してくれました。

通常でもなかなか思い通りに学習が進まない“夏休み”同様の苦勞に加え、コロナ禍による先が見えない不安、入試制度の相次ぐ変更などが重なりましたが、自走の姿勢を身につけていた生徒たちには、それらの苦難を自らのタフネスに変換するたくましさがあったように思います。

秋の息切れ対策に模試のデータを活用

休校期間明けの6～8月を休みなく走り続けた結果、9月の生徒たちには息切れが見られ始めました。立て直しに際して重要な役割を果たしたのが模試のデータです。

分析の結果、得点分布等にセンター試験時代とは異なる傾向が出ており、その後の学力の伸び方も例年とは違ってくると考えられました。こうしたデータをもとに、教科指導では「まだできる弱点克服」を追求。また出願指導でも、単に「大丈夫だ」と励ますのではなく具体的なデータを示し、「エビデンスに基づく伸びしろ」を生徒に理解してもらう面談を心がけました。

12月の進路検討会が持つ2つの意義

12月の進路検討会は、いかにして「担任を支える進路検討会」にできるかがカギです。つまり、担任が根拠と自信を持ち、生徒から信頼される出願指導を行えるように、他のメンバーが力を出し合う姿勢が求められます。

進路検討会では、データで生徒の力を把握し、合格に結びつけるための活用方法を議論しながら目線合わせを行います。これが、この時期の進路検討会の1つ目の目的です。

もう1つの目的は、生徒の伸びしろを個別に見極め、逆転合格をねらえる生徒の可能性を見いだすことです。12月以降の受験生は、データからは予測できない伸びを見せることが珍しくありません。複数の教員の視点で、この伸びの兆しをとらえることが進路検討会の重要な意義です。進学校を経験していない教員でも、生徒たちの振り返りをつぶさに見てきて、その資質を正しく見抜いていれば、こうした予測は可能です。大切なのはこの予測を「勘」で済ませるのではなく、「この生徒のこの科目への取り組み姿勢と

志望大の配点を考えると、共通テストで〇点以上であれば合格の可能性はある」といったように、言葉として「見える化」することです。言語化することにより生徒への出願指導に説得力が生まれ、また、次年度以降の入試に向けた知見が校内に蓄積されます。

共テ後の出願検討会は指導の集大成

どれだけ好調な学年でも、実際にセンター試験／共通テストを受けると、予想だにしない結果が多々生じます。2020年度の3年生もそうでした。そうした生徒に対して行う出願面談こそ、それまでの指導のクライマックスです。担任、進路担当、部活動の顧問なども加わり、どの大学に、なぜこだわるのか、時間をかけて面談を行いました。

受験を通してめざす地点は、生徒によって異なります。場合によっては、積み重ねた努力を形にできる手段として、合格できる大学を探してあげることも親身な指導の一つと言えるでしょう。方針が決まれば、決めたことを最後までやりきらせることが、その生徒の自信を形成します。

学年団の先生・生徒からの声と今後の展望

生徒たちの合格体験記に最も多く使われていたフレーズは「信頼できる先生方」でした。共に闘った教員からは「やりたいことを思う存分やったうえで、新たな目標を見つけた」「この3年間は宝物のような日々。もう1周やりたいくらい」との感想をもらえました。

これらの言葉に結実した3年間の進路ストーリーを、本校が今後も生かせる宝の地図になるように、普遍化、一般化していくことが私たちの課題です。共有できる進路ストーリーがあれば、入学時からよりいっそうの自信を持って生徒たちと伴走できることでしょう。

本レポート収録の菅原冬樹先生のご講演について



ご講演動画

アーカイブ動画を
こちらから
ご視聴いただけます

<https://is.gd/LCBtLE>



補足資料

以下のURLよりダウンロードしていただけます

<https://is.gd/qHpHR0>

教員向け資料

- ・3学年進路シラバス
- ・共通テスト後の出願面談に向けて

生徒向け資料

- ・3年学習指針例（英語・物理・国語）

新課程 1 期生入学に向けた学びの設計と実践

第 1 回

(2021年4月27日開催)

学習評価の充実に向けてすべきこと ダイジェストレポート


多くの学校で、今、新課程 1 期生入学に向けた準備・検討が始まっている。新課程では学習評価のよりいっそうの充実が求められるが、観点別評価の本格実施に向けては、一部の教師の取り組みにとどまっている学校も少なくない。育成をめざす資質・能力と各教科で育成したい資質・能力をひもづけ、それらを 3 つの観点別にどのように評価し、どう評定に結びつけていくか。新課程における学習評価の充実に向けてポイントを解説する。

1 学習評価の充実のためのマインドセット 『評価観の転換』生徒の成長を支援するための評価へ

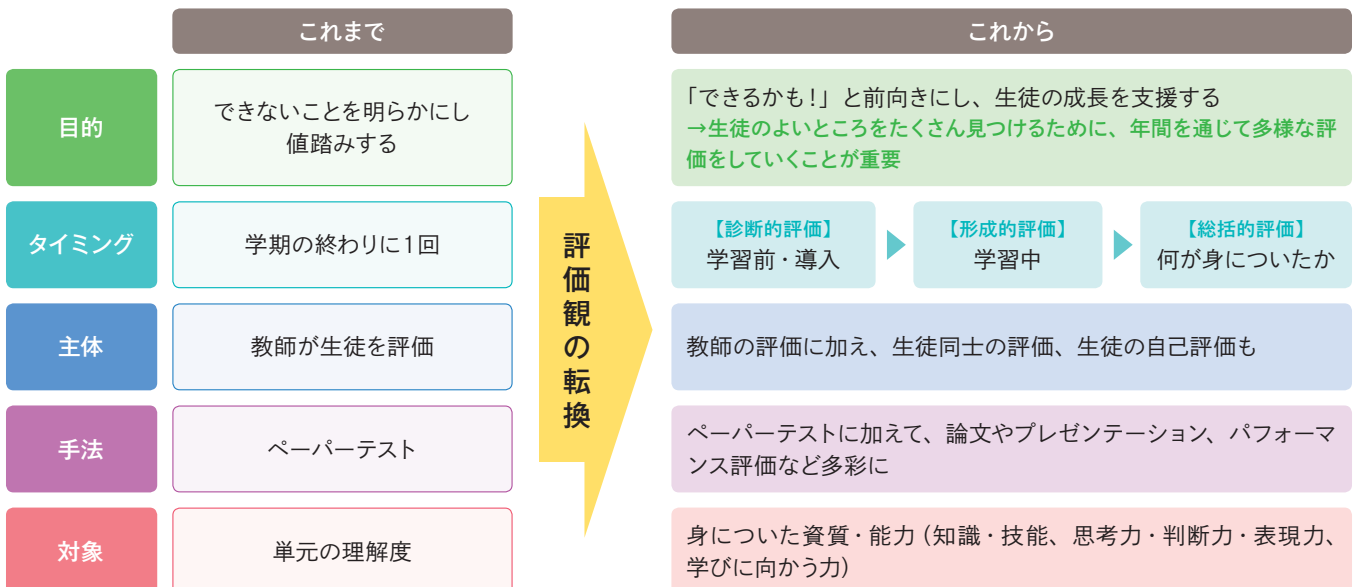
これまでの学習評価は、その主たる目的が生徒の序列化に置かれ、「わからないこと」や「できないこと」を自覚させるものだったのではないだろうか。しかしこれからは、指導だけでなく学習評価も含めて生徒を前向きにし、その成長を支援する機会とするために「できるかもしれない」と思わせ、生徒を主体的な学習へと導く必要がある。つまり、『評価観の転換』が求められているわけだ。

生徒のよい点・変化を多く見とっていくために、学習評

価は定期考査以外にも年間を通じて様々な手法で行われることになる。また、教師から生徒の一方通行的な評価だけでなく、生徒同士の相互評価さらに生徒自身の自己評価と、より多面的なものであることもポイントだ。

 上記の内容は、アーカイブ動画「新課程の全体像・要点整理」の 18 分 50 秒〜で詳しくご確認いただけます

■ 学習評価のこれまでとこれから



2 学習評価の充実のためのポイント整理

学校として育てたい資質・能力を評定に結びつけるために

学習評価の充実に向けて検討すべきポイントは3つだ。1つ目は、育成をめざす資質・能力を各教科で育てたい資質・能力にブレイクダウンすること。現状、ここがクリアできていない学校が少なくない。2つ目は、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力の3つの観点での評価を、多様な手法を用いてどのように評価していくかという評価計画の立案。そして3つ目は、観点別にみとってきた生徒の成長を、評定に結びつけること、である。この3つの検討ポイントに沿って、以下、事例とともにお勧めのアクションを紹介していく。

■学習評価の3つの検討ポイント

学校目標	評価の3観点	単元	単元	単元	期末	評定づけ
		②	②	②	評価	
学校として育てたい資質・能力の設定	①知識・技能	A	A	B	A	4
	②思考力・判断力・表現力	B	C	B	B	
	③主体的に学びに向かう力	A	B	A	A	

検討ポイント①
学校として育てたい資質・能力を教科で育てたい資質・能力に落とし込む

検討ポイント②
多様な手法で単元ごとに3観点を評価する計画を立てる

検討ポイント③
観点別の評価を評定に結びつける

▶ 上記の内容は、アーカイブ動画「観点別学習状況評価の解説」の9分45秒〜で詳しくご確認くださいませ

3 学習評価の充実のための実践ステップ その①

育てたい資質・能力を各教科の特性を加味して指導計画へ落とし込む

育てたい資質・能力を校内で浸透させる

まず、学校として育てたい資質・能力を校内に浸透させることが重要だ。秋田県立湯沢高校では、校内のミドルリーダー層が中心となって、育成をめざす資質・能力を「湯高力」として定めた。その湯高力を浸透させるため、下記の写真のようなマグネットシートを各教室に準備。授業の冒頭でその時間で培う湯高力を示すなどして活用している。

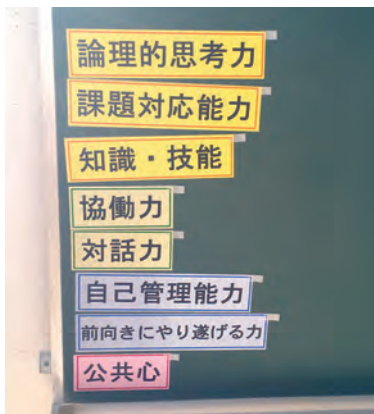
を理解したうえで、年間の授業計画に落とし込む。湯沢高校では、下のように「湯高力」を各教科・科目で育てたい資質・能力として教科のルーブリックに表現することで、湯高力と教科・科目の連動を図っている。学校として育てたい資質・能力を1教科・科目で網羅する必要はなく、教科・科目・学校行事などの特性を加味し、学校教育活動全体で育てたい資質・能力を育成・評価していくことが重要だ。

教科特性を加味し、授業の年間計画へ落とし込む

次に、学校として育てたい資質・能力を、各教科の特性

▶ 上記の内容は、アーカイブ動画「事例からみる学習評価の設計・実践ポイント」の1分30秒〜で詳しくご確認くださいませ

■育てたい資質・能力を意識させるマグネットシート



*秋田県立湯沢高校提供資料

■科目における資質・能力のルーブリック（『国語総合』）

科目		国語総合【現代文・古典】			授業時数	週5単位
		国語を的確に理解する能力を育成し、適切な表現を通して伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばし、言語文化に対する関心を深める態度を身につける。			履修学年・類型	1学年
評価の観点		知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性		
湯高力		【知識・技能】	【課題対応能力】 【論理的思考力】 【対話力】	【協働力】 【自己管理能力】 【前向きにやり遂げる力】 【公共心】		
	活用（使える）	●断章や読解のための技法を使い、複雑な論理展開ができる。また、抽象度の高い言葉や表現を使いこなすことができる。●古典の読解を通して古代の知恵を自己のものにし、他の古典作品の読解に役立てることができる。	●複雑な論理展開や難解な表現を分析し、わかりやすく説明したり、自らの考えを論理的に表現したりできる。●他作品と比較しながら、その作品の特色をつかむことができる。	●広く社会に目を向け、現象から原理を導き出したり、因果関係を導き出したりする主体性や探究心を身に付けている。●古代の人の知恵を自己のものにし、現代の社会や人の在り方について探究しようとする力を身に付けている。		
	学びの段階（利用できる）	●論理の構成や表現技法を理解し、論理的文章や文芸作品を読むことができる。また、自分の考えを表現することができる。●古語や古典文法、古典の背景を踏まえて古典作品を理解することができる。	●論理の展開や表現技法を把握し、文章の主題を的確に捉え、表現することができる。●既習作品の内容を踏まえ、他の古典作品を読むことができる。	●論理的・効果的に、自分の考えを他者と伝え合うとする力を身に付けている。●古典作品を自ら手に取り、古代人の知恵や歴史を味わうとする力を身に付ける。		

*秋田県立湯沢高校提供資料

4

学習評価の充実のための実践ステップ その②

シラバスを基軸に、多様な手法で資質・能力を3つの観点から評価する

次のステップは、資質・能力を多様な手法で評価する仕組みづくりだ。そのためにはまず、様々な評価手法の理解が欠かせない。評価を変える一歩目としては、定期考査など身近な評価から改善していくことも有効だ。さらに、評価の計画を含めたシラバスを作成し、身につけた資質・能力を、いつ・どのような手法でみとっていくかについて生徒にも周知していく。

多様な評価手法を理解する

生徒のよさや成長を、多面的にみとっていくために、ペーパーテスト、パフォーマンステスト、ポートフォリオなど、多様な評価手法を活用していきたい（右図）。指導場面に応じて、生徒のどのような資質・能力を評価するのか、そのためには、いつ・どういった評価手法を採用するのがよいのかを判断することが重要になる。これまで評価といえば、ペーパーテストの点数が大きなウエイトを占めていたが、学力の3要素を多面的にみとり、よい面を積極的にフィードバックすることで「自分にもできるかもしれない」と前向きにしていくためには、目的や場面に応じて評価手法を使い分けることが不可欠だろう。

ペーパーテストを改善する

評価手法の多様化は、ペーパーテストの軽視につながるものでは決してない。例えば、秋田県立湯沢高校では、定期考査において、その問題が、同校が育成をめざす資質・能力のどれを測る問題なのかを明示する取り組みを一部の教科で始めている。当然、ペーパーテストを作問する際教師の意識も変えていくことになるが、ペーパーテストが変われば、日々の授業のあり方もより資質・能力の育成を意識したものになるだろう。

シラバスの作成

右の山形県立米沢興譲館高校のシラバスは、評価方法の欄において観点別に評価する手法とその割合を明記している（20年度のシラバスのため4観点となっている）。関心・意欲・態度をレポート20%、相互評価20%、各種提出物60%で評価などと決めることで、単元を通じて資質・能力を育成するという目的を教師間で共有し、さらに生徒の相互評価や自己評価など多様な評価手法の採用を教科団全体として促すことができる。

■多面的な評価手法

種類	内容例	タイミング例
ペーパーテストによる評価	<ul style="list-style-type: none"> 選択肢問題 穴埋め記述式問題 記述問題 論述問題 	<ul style="list-style-type: none"> 単元終了時 単元の各観点 中間試験・期末試験
パフォーマンスによる評価	<ul style="list-style-type: none"> 論説文やレポート、展示品といった完成作品（プロダクト）やスピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演 	<ul style="list-style-type: none"> 学習過程
観察による評価	<ul style="list-style-type: none"> いつ、何を、どのように学んだか。そして、その成果としてどのようなことがわかったか、どのような活動や表現として生徒が表出したか 	<ul style="list-style-type: none"> 学習過程（長期的・継続的）
ポートフォリオによる評価	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が学習過程のなかで活動した作品の記録 学習記録 	<ul style="list-style-type: none"> 単元終了時 学期終了時 学年終了時
ルーブリックによる評価	<ul style="list-style-type: none"> 評価する内容を文章表記し、評定の段階を表として、その尺度と評価項目とを目標として提示した評価内容の基準表 	<ul style="list-style-type: none"> 単元の終了時 単元の各観点

■ペーパーテストの改善（1学年「物理基礎」）

12 **湯高力**【課題対応力】利用～活用

水平であらい床面上にある質量5.0 kgの物体
水平方向に大きさ F [N]の力を加え続けたとこ
は一定の速さ 0.50 m/s で力の向きに運動を続け

*秋田県立湯沢高校提供資料

■シラバスの例（2学年「地理歴史」）

評価の観点	評価の趣旨	評価のフィードバック			
		1学期末	2学期中	2学期末	学年末
① 関心・意欲・態度	自然の事象・現象に関心や探究心を持ち、意欲的にそれらを探究しようとするとともに、科学的態度を身に付けている。	○	○	○	○
② 思考・判断・表現	自然の事象・現象の中に問題を見いだし、探究する過程を通して、事象を科学的に考察し、導き出した考えを的確に表現している。	○	○	○	○
③ 観察・実験の技能	観察、実験を行い、基本操作を習得するとともに、それらの過程や結果を的確に記録、整理し、自然の事象・現象を科学的に探究する技能を身に付けている。	○	○	○	○
④ 知識・理解	自然の事象・現象について、基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。	○	○	○	○
⑤					
評価方法	① 授業態度 30% ・小テスト 40% ・課題提出 30%	② ペーパー試験 70% ・実験レポート 30%	③ 実験レポート 100%	④ ペーパー試験 50% ・小テスト 50%	⑤ 年間時数 予定
育てる興譲館DOC	「批判的思考力」「質問力」「多視点性」「表現力」「コミュニケーション力」				実施
D	「メタ認知」「批判的思考力」「質問力」「多視点性」「独創性」「受容力」「交渉力」				
C	「コミュニケーション力」「自文化理解・異文化理解」「自律・自立性」「思いやり」「傾聴力」「郷土愛」「挑戦」				

*山形県立米沢興譲館高校提供資料



上記の内容は、アーカイブ動画「事例からみる学習評価の設計・実践ポイント」の7分1秒～で詳しくご確認いただけます

5 学習評価の充実のための実践ステップ その③

育成をめざす資質・能力を踏まえて観点別の評価を「評定」に結びつける

最後のステップは評定との連動だ。様々な評価手法を活用し、多面的に資質・能力をみとった結果を、「評定」と連動させる必要がある。それぞれの教科・科目では、単元ごとにA・B・Cと評価をつけ、最終的な評定をつけることになる。その際、「AAAなら4以上」「BBBなら3」など最低限のルールに加えて「思考・判断・表現力は、本校の重点領域であるので、ここがBならば4とする」などと、学校で身につけさせたい資質・能力を各教科にブレイクダウンさせ、それに沿って評定の基準、定義を決めることが重要になる。そして、授業で育成する資質・能力の理解や納得感のある評価とするためにも、評定の基準、定義は生徒・保護者に向けても開示しておくことが欠かせない。

▶ 上記の内容は、アーカイブ動画「事例からみる学習評価の設計・実践ポイント」の14分1秒〜で詳しくご確認ください

■ 観点別評価と評定の連動イメージ

	知識・技能	思考・判断・表現力	主体的に学習に取り組む態度
単元①	A	A	B
単元⑤	B	A	B
1学期	A	A	B

一例として、1番多いものを採用するというパターンを表示

パターン	評定	理由
AAA	5	
AAB	5	Aが2つ以上あれば、5とする。ただし、●●高校の●●科として、シラバスにも記載のとおり、思考・判断・表現力の育成を重要視しているため、思考・判断・表現力がBの場合は、他2観点Aであっても4とする。
ABA	4	
BAA	5	
ABB	3	

大切なのは基準を決めシラバスに明記すること

Webセミナーアーカイブのご案内



Webセミナーの詳細はハイスクールオンラインサイトでご視聴いただくことができます。
[ハイスクールオンラインTOP](#) > [新課程](#) > [【特設コーナー】ウェブセミナー](#) [新課程1期生入学に向けた学びの設計と実践 \(アーカイブ\)](#)
https://bhsso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/index.shtml

今後のWebセミナーのご案内

新課程1期生入学に向けた学びの設計と実践、第2回、第3回Webセミナー開催決定!

第2回

5月28日(金) ※6月1日(火) 録画再放送

テーマ 生徒のやりたい!を引き出す探究的な学び実践の第一歩

基調講演 千代田区立九段中等教育学校
宮城県仙台第三高等学校



案内書はこちらからご覧ください

第3回

6月25日(金)

テーマ 学校で育てたい資質・能力の設定と授業実践を通した次年度計画

基調講演 秋田県立湯沢高等学校

※詳細は後日、学校宛にFAXにてご案内申し上げます。

※セミナーの内容は現時点での予定であり、変更の可能性があります。

問い合わせ先

株式会社ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 教育情報部 教育情報センター

◎お客様サービスセンター

TEL 0120-350455 (通話料無料)

受付時間 (祝日、年末・年始を除く) 月～金 8:00～18:00 土 8:00～17:00



新課程 1 期生入学に向けた学びの設計と実践

第 2 回

(2021年 5 月 28 日開催 / 6 月 1 日再放送)

生徒のやりたい!を引き出す 「探究的な学び」実践の第一歩 ダイジェストレポート

新課程 1 期生の入学を来年に控え、「総合的な探究の時間」や、各教科における「探究的な学び」のより一層の充実が求められている。学問への興味・関心を高めたり、キャリアを考える機会としての期待がある一方、具体的な実践に向けては課題を感じている教師は多い。そこで、新課程 1 期生入学に向けて「探究的な学び」をどのように設計し、実践するかについて 2 つの事例をもとに考えるウェブセミナーを開催した。

はじめに 探究的な学びの推進には 3 つの課題がある

「探究的な学び」の実現に向けては、探究全体を設計する探究担当の教師、授業を担当する担任教師、そして実際に学びを進める生徒の 3 者が、それぞれ異なる悩みを抱えている (図 1)。

3 者が直面する悩みを検証していくと、探究的な学びを推進するために重要な 3 つの課題として、「マインドセット」

「スキル」「アウトプット」が浮かび上がってきた (図 2)。探究的な学びを推進するために解決すべき 3 つの課題を相互に作用するものとして捉え、その解決に取り組んだのが今回の 2 名の講師だ。3 つの課題に向き合いながら探究的な学びのサイクルを回していった取り組みを紹介する。

図 1 探究担当教師・担任教師・生徒と、立場によって悩みは異なる

探究担当教師の壁

- 教師間の巻き込み
担任にスムーズに動いてもらうには……
- 外部の巻き込み
外部の協力先が見つからない
- カリキュラム・教科連携
カリキュラムの策定が難しい / 他教科と連携したいができない

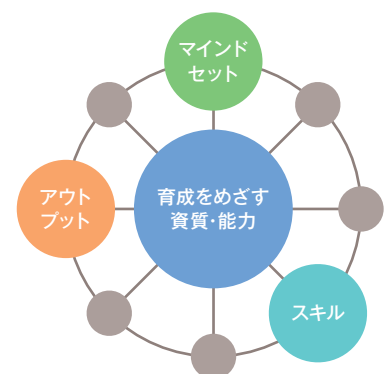
担任教師の壁

- マインドセット
「総合的な探究の時間」の意義って？
- 指導法
専門知識がないから指導が不安 / 指導法がわからない
- 探究の深まり
調べ学習で終わってしまう / 次の活動・社会につながっていかない

生徒の壁

- マインドセット
受験に使わないのに……
- 課題設定
やりたいことが見つからない
- 探究スキル
調べ学習で終わってしまう

図 2 探究的な学びにおける課題



講師紹介

実践事例 1

校内で探究活動を企画・推進するうえでのポイント



千代田区立九段中等教育学校
6 学年 (キャリア教育部)・
情報科

須藤祥代先生

すどう・さちよ

東京都の総合学科の高校を経て、2015 年度より同校に勤務。
学び方を学ぶインストラクショナルデザインを模索中。

実践事例 2

授業の中で探究を取り入れるうえでのポイント



宮城県仙台第三高等学校
1 学年担任・英語科

西村吉史先生

にしむら・よしふみ

宮城県白石高校在任時代に培った ICT、SDGs、問いづくりの
スキルを活用し、生徒の主体的な学びを模索し続けている。

校内で探究活動を企画・推進するうえでのポイント

千代田区立九段中等教育学校 6学年 (キャリア教育部)・情報科 須藤祥代先生

【講演要旨】

6年間の「総合的な探究の時間」の流れのなかで最も大切にしているのは、4年生（高校1年生）の「探究の種づくり」だ（**投影スライド1**）。生徒のやる気に火をつけるために、弊社教材「進路サポート」の付属教材である「学問カルタ」や自己分析ツールを使って、興味・関心と現段階での希望進路を生徒に問い、探究テーマにつながるキーワードを出させていく。

生徒が探究のプロセスを設計する場面で重要なのは調査研究とソーシャルアクションだ。調査研究では、文献調査だけでなくインタビューやアンケートなども行い、複数の調査結果を比較させる。そして、自分はどんな未来をつくりたいのか、そのためにはどのような行動をしたらよいかというソーシャルアクションまでを考えさせる。

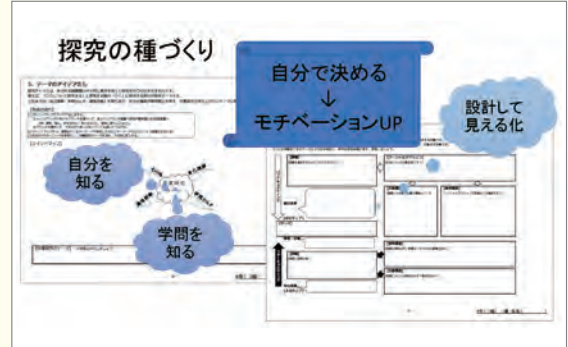
探究に取り組む過程では、それまでの自分の探究プロセスの中に修正すべき点があったと生徒が気づくことがあるが、それは歓迎すべき失敗であると生徒には説明している。

計画、論文、プレゼンといった探究のプロセスごとに校内共通のフォーマットのワークシートを作成（**投影スライド2**）し、ワークシートと指導案をセットで教師に配付（**投影スライド3**）している。指導の手順を細かく示すことで、全体像を教師が理解できるようになり、個々の生徒の取り組みにも対応しやすくなった。また、探究テーマが似た生徒を集め、教師の教科や興味に合わせながら、教師2人で約15人の生徒をゼミとして構成。提出物の締め切り期限などは共通だが、進め方は各ゼミに任せた。進度が遅く個別対応が必要な生徒には、学年団が個別カウンセリングなどを実施することで、ゼミの教師の負担軽減をめざした。

「総合的な探究の時間」と教科との連携も行っている。「情報の科学」では問題解決学習を実施、アンケート実習など探究のプロセスや探究に必要なスキルを学習している。「情報の科学」で培ったスキルを「総合的な探究の時間」で生かしている。教科を越えていろいろな場面で探究に取り組むことが重要だ。

生徒が主体的に学ぶきっかけづくりによって、生徒はアクティブラーナーとなり、ファシリテーターである担任教師のモチベーションが上がる。探究担当教師はコーディネーターとして、生徒や担任教師の状況を見とりながら、既存の資源を生かしてカリキュラムマネジメントやコンテンツ制作を行っていくことが求められる（**投影スライド4**）。

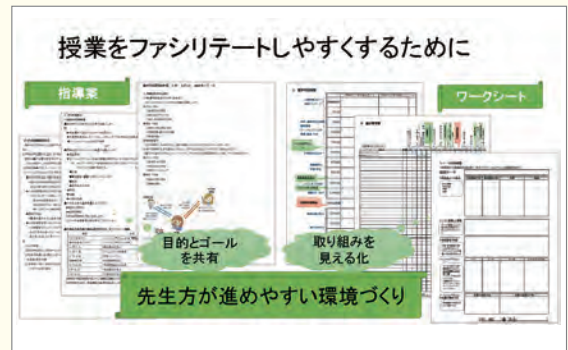
● 投影スライド1



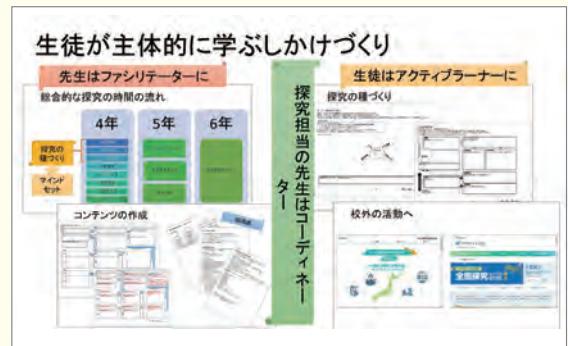
● 投影スライド2



● 投影スライド3



● 投影スライド4



授業の中で探究を取り入れるうえでのポイント

宮城県仙台第三高等学校 1 学年担任・英語科 西村吉史 先生

【講演要旨】

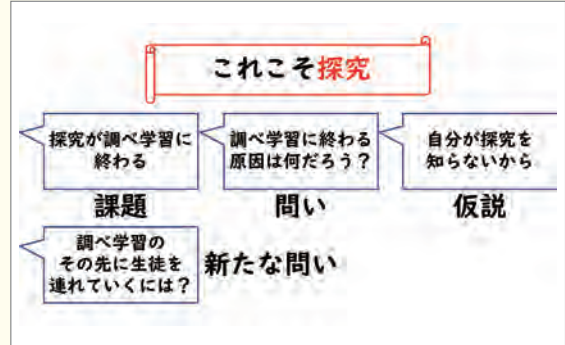
「総合的な探究の時間」における生徒の学びが調べ学習に終わるのはなぜか。「自分が探究を知らないからではないか」「調べ学習のその先に生徒を連れていくにはどうすればよいか？」と自分自身に問いを与え、探究についての探究を始めた（投影スライド 1）。学習指導要領解説を読み、「主体的・協働的、教科横断、価値創造、自己の在り方・生き方」といったキーワードに沿って探究をデザインしようと考えた。探究とはどういうものか、実際のデザインの方法や問いづくりを書籍などを通して学ぶなかで、探究における様々な型や事例を教師が多く知っておくこと、問いづくりのスキルを持っておくことで、生徒の探究を深めることができると見通しを得た。

教科の学びが探究につながっていく（投影スライド 2）ように、自教科（英語）の授業デザインを見直し、探究で生徒が活用できるコンテンツとスキルを提供するようにした（投影スライド 3）。まず、コンテンツとしては、授業の冒頭で、マイクロプラスチック、孤食、コロナがもたらした分断など SDGs とつながる社会課題を表す写真や動画を紹介。それをもとに生徒が自分の意見を英語で述べるといった活動を授業に取り入れている。教科書で学んだ内容が SDGs のどのゴールにつながっているのか、なぜそう思ったのかを英語で話させることもある。こうした活動が、社会課題への生徒の興味・関心を広げ、いろいろな意見を共有し、多様性を受け入れる土壌をつくっている。

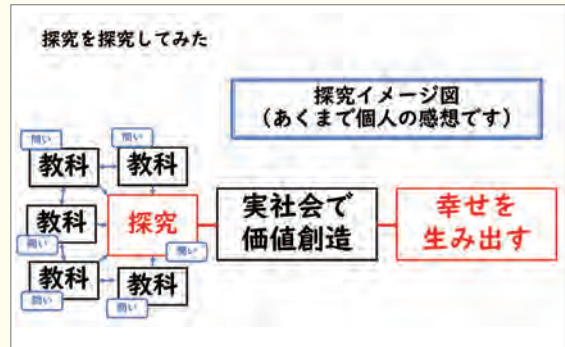
授業で行う探究スキルの育成は、問いづくりのトレーニングだ。社会課題を表す写真や動画を題材に、ペアになった生徒が交互に問いづくり、相手に質問し、英語で答える。こうした問いづくりで養った力は、英作文指導や大学入試の面接指導にも生きてくる。英作文の指導では、生徒は大学をテーマに問いづくりを行ったうえで、英作文を作成した（投影スライド 4）。問いづくりの方法を理解することで、生徒は目の前の事象を多角的にとらえ、深く思考することができるようになる。

探究や他教科の授業で身につけさせたいのは、VUCA の時代でも幸せになるために他者と協働してしなやかに生きていくスキルだ。生徒の学びを、人生を探究するためのマインドセットを得るためのものとなるように、自身の授業をこれからもよりよくデザインしていきたい。

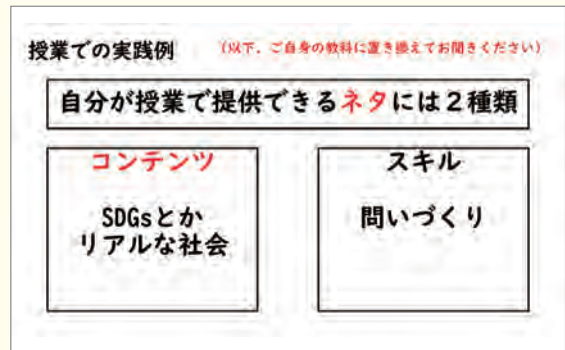
●投影スライド1



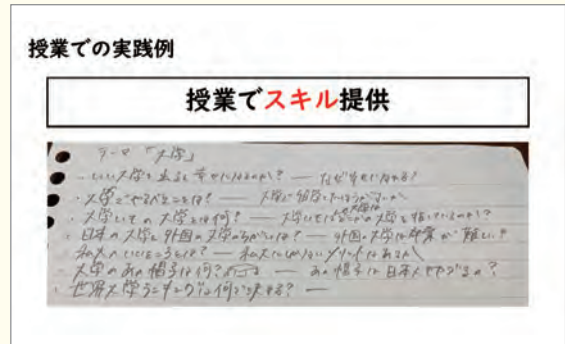
●投影スライド2



●投影スライド3



●投影スライド4



まとめ 「マインドセット・スキル・アウトプット」から第一歩を踏み出す

2人の講師の講演でも取り上げられたように、探究においての「マインドセット」「スキル」「アウトプット」の3つの課題は、自校の「総合的な探究の時間」や授業における探究的な学びの改善点を見つけていくうえで重要な手が

かりとなるだろう（図3）。それぞれは独立したものではなく、相互に作用しあっている点にも注意したい。

なお、ベネッセでは、探究的な学びにおける生徒、教師の「マインドセット」「スキル」「アウトプット」をサポートする多彩な教材・サービスを展開している（図4）。なかでも、「探究ナビ・探究ナビ Basic」は、探究のスキルを育成する教材として低学年時に、「Classi × マイプロジェクトサポート」は、アウトプットの機会として2年次に活用いただくことで、探究的な学びが一層深まっていくことが期待できるだろう。

図3 ご講演から見る「探究的な学び」実践のポイント

マ イ ン ド セ ッ ト	<ul style="list-style-type: none"> ■役割の明確化 教師はファシリテーター、探究担当はコーディネーター ■目的・ゴールイメージの共有 活動の意義・意図に加え、生徒の探究事例も共有 ■安心安全の場づくり 先生、生徒ともに失敗してもよい、まずはチャレンジ
ス キ ル	<ul style="list-style-type: none"> ■スモールステップで提示 取り組みは細分化して可視化する ■多様な FMT を活用 外部の教材を含め、既存のフォーマットも積極的に活用 ■取り組みは見える化 進捗や取り組みを見える化しすぐにフォローができる状態に よい取り組みは校内で積極的に広げる
ア ウ ト プ ッ ト	<ul style="list-style-type: none"> ■「アクション」を計画に入れる 発表だけでなく外部への行動が次への気づきを生む ■外部の企画も積極活用 多様な活躍の場が生徒の達成感やさらなるやる気に ■評価・振り返りで深める 成果を実感することが次のチャレンジを後押し

図4 探究的な学びに関するベネッセの教材・サービス

	1年生	2~3年生
育成	探究ナビ・探究ナビ Basic	Classi × マイプロ
	探究ラボ	
表現	探究ナビコンテスト/マイプロジェクトアワード/ベネッセSTEAMフェスタなど	
評価	GPS-Academic・Literas	
事例	探究 Lab・Benesse High School Online・オンラインセミナーなど	

Webセミナーアーカイブのご案内



Webセミナーの詳細はハイスクールオンラインサイトでご視聴いただくことができます。
[ハイスクールオンラインTOP](#) > [新課程](#) > [【特設コーナー】ウェブセミナー 生徒のやりたい!を引き出す「探究的な学び」実践の第一歩（アーカイブ）](#)
https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/index.shtml

今後のWebセミナーのご案内

新課程1期生入学に向けた学びの設計と実践、第3回、第4回Webセミナー開催決定!

第3回

6月25日(金) 15:30 ~ 17:00

テーマ 育てたい資質・能力の設定と
授業実践の第一歩

実践事例発表 秋田県立湯沢高等学校
平田恵子先生

案内書はこちらからご覧ください



第4回

7月1日(木) 16:00~17:30 ※録画再放送7月6日(火)

テーマ 新課程教科「情報」に向けて今、
始められる準備

実践事例発表 私立日出学園中学校・高等学校
武善紀之先生

案内書はこちらからご覧ください



※セミナーの内容は現時点での予定であり、変更の可能性があります。

問い合わせ先

株式会社ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 教育情報部 教育情報センター
 ◎お客様サービスセンター
 TEL 0120-350455 (通話料無料)
 受付時間(祝日、年末・年始を除く) 月~金 8:00~18:00 土 8:00~17:00



新課程 1 期生入学に向けた学びの設計と実践

第3回

(2021年 6 月 25 日開催)

育てたい資質・能力の設定と 授業実践の第一歩

ダイジェストレポート

新課程 1 期生入学を来年に控え、学校として育成を目指す資質・能力と、各教科・科目で育てたい資質・能力を結びつけ、指導と評価を再設計することが求められている。4月に「学習評価の充実」をテーマに第1回 Web セミナーを開催したところ、「検討事項は整理されたが、より具体的な実践事例が知りたい」というお声を多くいただいた。そこで、4月のセミナーでも事例としてご紹介した秋田県立湯沢高等学校の先生を講師としてお招きし、新課程に向けた指導や評価のポイントについてご講演いただいた。観点別評価の実践にいち早く取り組む静岡県立御殿場高校の事例とともに新課程に向けた実践を紹介する。

本セミナーの動画・資料はベネッセハイスクールオンラインからご覧いただけます。詳細は P.4 をご覧ください。

はじめに 新課程に向けた取り組みの現状と課題

Web セミナーでのアンケート調査によると、新課程に向けた課題として、学習評価の設計、評価観の転換、育てたい資質・能力の結びつけ、授業改善・実践に関する課題感が高いことが明らかになった（投影スライド1）。指導と評価の改善を同時に行うことが望ましいが、一気にすべてを変えるのは負担が大きい。先進校の実践の様子から、「授業改善から」「評価観の転換から」などと、自校の状況に合わせて実践ポイントを決めているという共通項が見えてきた。ただ、指導、評価いずれから着手するにしても、計画には、どちらの視点も盛り込んでおくことが重要だ。実際、授業研究は熱心だが、評価計画を十分に検討していないがため

に、学習評価の改善が進んでいない学校もある。両方の視点を取り入れ、職員会議、教科会などで取り組みを振り返る機会も設定しながら、22年度以降を見据えた計画を立てたい（投影スライド2）。

今回の Web セミナーでは、資質・能力を意識した授業改善からスタートし、その後、評価観の転換を行った事例として秋田県立湯沢高校の平田恵子先生にご講演いただいた。また、ベネッセからの発信のなかで、まずは観点別評価の実践に取り組み、指導観の転換へとつなげていった静岡県立御殿場高校の事例も取り上げた。異なるアプローチの実践事例として参考にしていただきたい。

● 投影スライド1



● 投影スライド2



秋田県立湯沢高等学校 1学年主任 平田恵子先生

湯沢高校では、学校として育成を目指す資質・能力（＝湯高力）の設定や、湯高力を反映させた教科ルーブリックの作成などを推進。現在は、研究授業などの機会も活用しながら、授業改善や学習評価の充実にも着手している。2021年度を新課程を見据えた準備・実践の1年と位置づけ、様々な取り組みを展開している。



育成を目指す資質・能力を設定し、その実現を図る授業改善を推進

湯沢高校は、校訓や学力の3観点と結びつけながら、学校として育成を目指す8つの資質・能力を「湯高力」と定め（投影スライド3）、資質・能力のルーブリックを作成。その後、教科・科目ごとのルーブリックの作成に着手したが、作成段階から校内の共有フォルダでいつでも見られるようにし、他教科のルーブリックを参考にしながら各教科会でブラッシュアップをしていった。

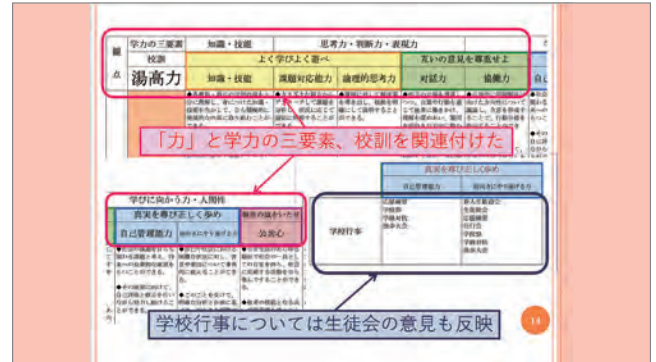
各教科の指導に「湯高力」を浸透させる施策の1つは、マグネットシートの活用だ。黒板に8つの湯高力を記したマグネットシートを常に貼りつけ、授業の際に利用することで、教師も生徒もこの授業でどのような力をつけるのかを意識できるようになった（投影スライド4）。また、学習指導案に「湯高力」を反映させたり、学習プリントや定期考査にもその問題と関連する「湯高力」を明示したりしている。（投影スライド5）。21年度からは、総合的な探究の時間や学校行事でも「湯高力」を示し、教師、生徒ともに日々育成を目指す資質・能力を意識して教育活動に臨んでいる。

授業実践を進めるなかで評価のあり方を見直す必要性を実感

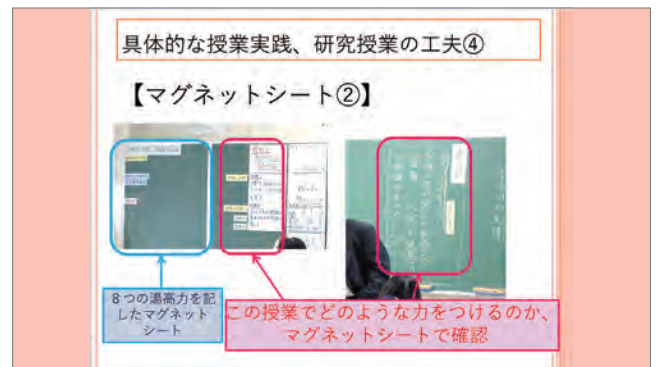
資質・能力を意識した授業を進めるなかで、評価においても、単元の理解度に関する評価から、育成すべき資質・能力の成長をみとる評価へと転換する必要性を感じ始めた（投影スライド6）。また、生徒による自己評価を実施したところ、学年会などで重視して伝えた資質・能力が向上する傾向にあることがわかった。この結果は、教師の意識や声かけが生徒を変容させるのだということを証明するものであり、「湯高力」という合い言葉で学校が一丸となって指導する重要性を改めて感じた。また、自己評価が生徒が自分自身の力を客観的、かつ前向きにとらえることができるものだ実感した。21年度はさらに多様な評価方法を実践し、観点別評価から評定の仕組みづくりまで行う予定だ。

教育活動の改善には、こうすればよいという正解はなく、まずはやってみて、課題を出して、常に改善していくことが重要だ。本校もまだまだ発展途上で、課題も山積みだが、生徒のよりよい成長にこの取り組みが一助となることを信じ、これからも改善し続けたいと考えている。

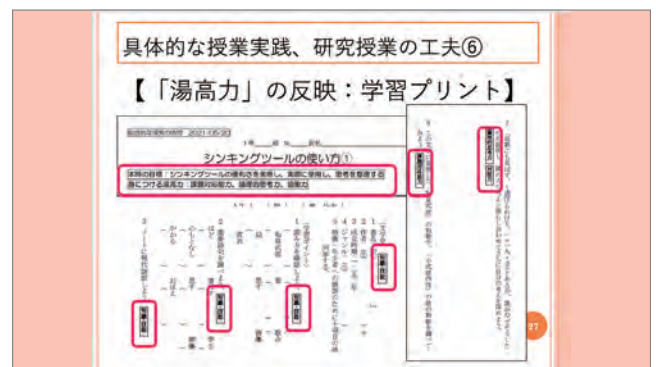
●投影スライド3



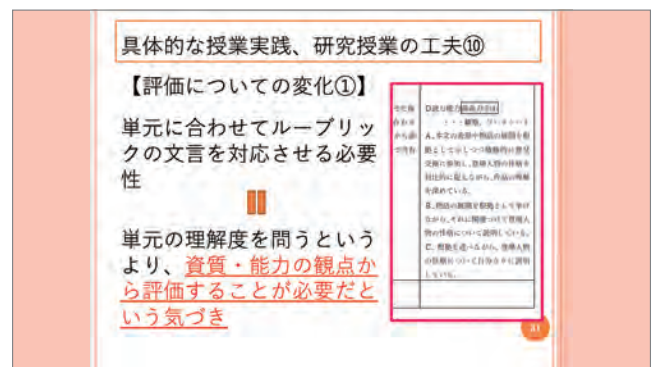
●投影スライド4



●投影スライド5



●投影スライド6



観点別評価の実践を通じた評価観・指導観の転換

静岡県立御殿場高校

新課程を見据えて 20年度から3観点での観点別評価を実践

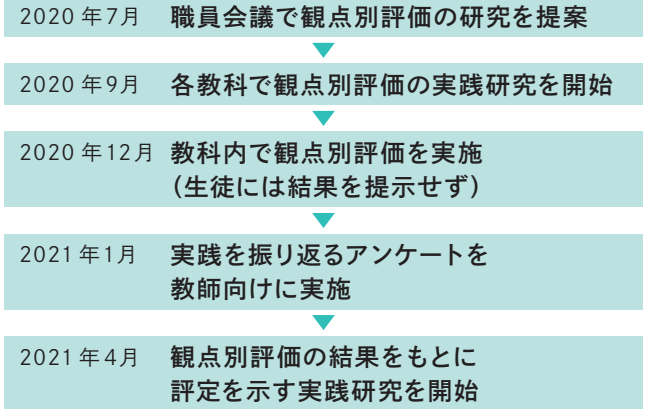
御殿場高校では、2022年度を見据え、20年度に観点別学習状況の評価に関する校内実践研究に取り組んだ。具体的には、7月の職員会議で校内実践研究を提案。2学期からすべての教科・科目で3観点での評価を行い、実際に評価を出し、そこでの気づきを21年度に生かして、新課程1期生の入学に備えるというものだ(図1)。

職員会議では、研究で特に重視してほしい内容として、次の2点を共有した。1点目は、現状の4観点と新しい3観点の切り分けだ。特に、「知識」と「技能」が「知識・技能」と1つの観点となったことで、どのような変化が生じるのか、研究を進めた。2点目は、3観点による評価と、現状の評価とのずれだ。生徒に対する現行課程での評価と3観点の評価とのずれが大きい場合は、その原因がカットラインなのか評価材料なのかを各教科団で考えることとした。なお、20年度の3観点での評価は、校内実践研究であり、現行課程の評価とは異なるため、生徒への共有はしなかった。

各教科の具体的な実践について紹介する。定期考査では、考査を通じて評価する資質・能力について生徒に丁寧に説明をし、そのうえで、合計点に加え、観点別の得点も答案に明記した。また国語科では、「主体的に学習に取り組む態度」について、ルーブリックを並記した「単元まとめレポート」を課し、ABCで評価をして生徒に返却している(投影スライド7)。生徒には、評価に一喜一憂せず、ルーブリックを見直し、足りなかったことや次にすべきことを考えるよう促している(投影スライド7)。

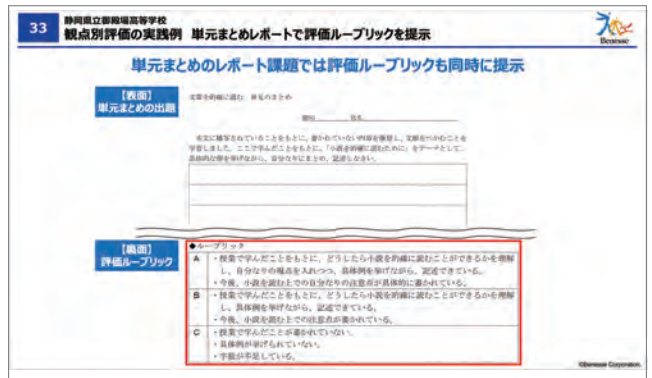
2学期の実践を経て、21年1月に教師向けに実施したアンケートから、特に「主体的に学習に取り組む態度」の評価の難しさが浮き彫りになった。一方で、生徒の学習の様子をみとる重要性を認識したり、授業改善に生かすことができたという前向きな声も多く聞かれた(投影スライド8)。21年度は、観点別評価を評定に結びつけ、生徒の実態に合った評価計画を作成していく。

図1 御殿場高校の取り組みの流れ

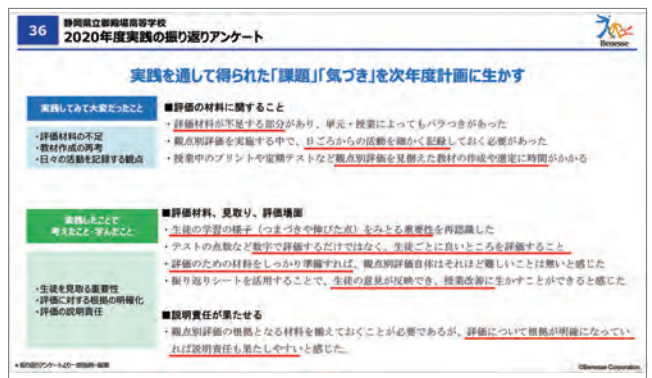


*学校資料を基に編集部で作成。

●投影スライド7



●投影スライド8



御殿場高校の
お取り組みの詳細は
こちら!

- ・ハイスクールオンライン TOP > 新課程 > [先生インタビュー] 観点別学習状況の評価の実践
にお取り組みに関するインタビュー動画と学校資料を掲載しています。ぜひご覧ください。
- ・「VIEW next」高校版8月号「新課程レポート」にインタビューを掲載しています。そちらも併せてご覧ください。

https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/report/210006.html

まとめ ▶ 講演から見た新課程に向けた準備のポイント

授業改善から着手した湯沢高校、観点別評価の実践から始めた御殿場高校と新課程に向けた準備のアプローチが異なる2校だが、取り組むべきポイントを決めて実践したという点が共通している。

これから新課程に向けての準備に着手するという学校は、授業改善と評価、どちらかを選んで、まずスタートすることが重要だ。ただし、その際にも、指導と評価の両方を意識しながら実践を推進することがポイントとなる。例えば、授業改善からスタートした場合も、研究授業や教科会などで指導ノウハウを共有しながら、授業で育成している資質・能力をどのようにしたらみとることができるかを検討していく必要がある。また、評価から取り組んでみようという

学校は、細かい計画でなくても、大枠・方針を共有しながら、各教科の実践を促し、定期考査を観点別の出題にしたり、振り返りレポートを活用したりしながら、多様な評価を取り入れていく。そして、みとりたい資質・能力を育成するための手段として、現状の授業のあり方は適切かを見直し、授業改善を進めていく。授業改善と評価観の転換のどちらから始めても、振り返りの機会を丁寧に設け、課題だけでなく、よかったこと、学んだことについて共有することも重要だ。

今後もベネッセでは、様々な事例を通じて、新課程1期生入学に向けた各校の準備の支援を続けていく。

Webセミナーアーカイブのご案内



Webセミナーの詳細はハイスクールオンラインサイトでご視聴いただくことができます。
ハイスクールオンラインTOP > 新課程 > 育てたい資質・能力の設定と授業実践の第一歩
https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/index.shtml

ハイスクールオンライン 新課程ページリニューアルのお知らせ!

「あのWebセミナーをもう一度見たい!」
過去のWebセミナーを掲載



「探究、教科『情報』に関する情報が欲しい!」
事例や有識者の解説動画が資料一覧から検索可能



今後も様々な情報をUPしていく予定です! ぜひご覧ください!

問い合わせ先

株式会社ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 教育情報部 教育情報センター
◎お客様サービスセンター
TEL 0120-350455 (通話料無料)
受付時間(祝日・年末・年始を除く) 月～金 8:00～18:00 土 8:00～17:00



新課程 1 期生入学に向けた学びの設計と実践

第 4 回

(2021年7月1日開催 / 7月6日再放送)

新課程 教科「情報」に向けて 今、始められる準備 ダイジェストレポート

新課程で「情報Ⅰ」が共通必修科目、発展的な内容の「情報Ⅱ」が選択科目となり、教科「情報」の学習内容は大幅に拡充される。「情報」は、新学習指導要領に対応した 2025 年度大学入学共通テストから出題教科となるため、学校現場の関心は極めて高い。今回の Web セミナーでは、新課程 1 期生入学に向けて教科「情報」をどのように準備すればよいか、実践者の報告をもとに考えた。

はじめに 新課程「情報Ⅰ」と現場の課題

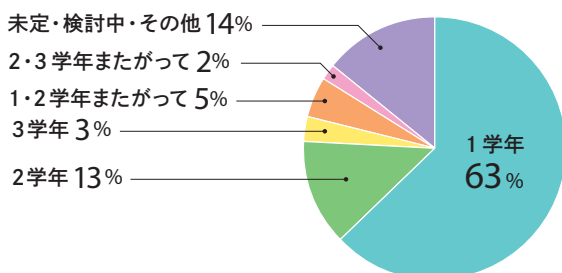
新課程で必修となる「情報Ⅰ」は、多くの先生にとって現行指導要領からの変化が最も大きい科目の一つだ。具体的に变化した点を見てみると、まず、情報デザインやプログラミングといった新しい単元が設けられ、内容も高度化していることが挙げられる。さらに、新学習指導要領では、特に数学科と公民科との連携への配慮が明記された。そして、大学入学共通テストへの導入に向けた対応が求められている。このように、「情報Ⅰ」については校内で検討すべき事項は多い。

Web セミナー参加者の事前アンケートでは、63%の高校が「情報Ⅰ」を 1 年生で履修する予定であることがわかった(図 1)。「情報Ⅰ」の準備は、22 年度に向けてまさに喫緊の課題と言える状況だ。

だが、現実には、半数近くの高校が、準備の必要性を感じているものの、何から始めればよいかわからないという状態であり、「情報Ⅰ」の準備は順調とは言えない(図 2)。教科「情報」は、今なお専任教師が少ないのが現状であり、教師不足のなかでどのように指導体制を構築していくかを模索している段階だと考えられる。

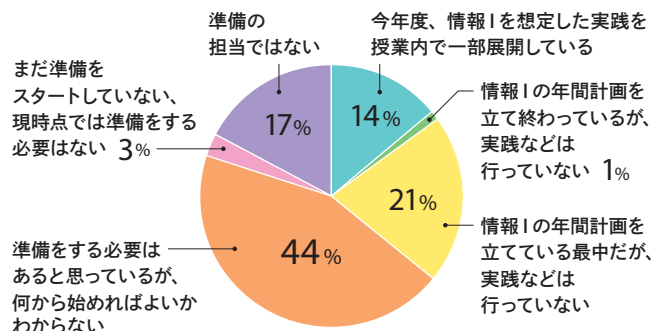
今回の Web セミナーでの武善紀之先生の講演では、「情報Ⅰ」のコンセプトを確認したうえで、22 年度の新課程 1 期生に向けた授業計画を、具体例を交えながら紹介いただいた。これまでの自校の実践例を生かした、他教科との兼任の教師でも可能な実践は、多くの高校の参考となるはずだ。

図 1 新課程「情報Ⅰ」の履修予定学年



* 2021年7月情報教育に関するセミナーの事前アンケート 515 名集計結果

図 2 新課程「情報Ⅰ」の準備状況



* 2021年7月情報教育に関するセミナーの事前アンケート 515 名集計結果

教科「情報」に向けて今、始められる準備

私立日出学園中学校・高等学校 武善紀之先生

たけよし・のりゆき 情報科を主軸に数学科、公民科、総合的な学習（探究）の時間も年度により担当。昨年度まで、法人企画室ICT推進チームを兼務し、学園全体のICT教育推進にもかかわる。東京書籍株式会社から発行されている各種教材の執筆・編集にも携わっている。



「情報I」のコンセプトは コンピュータを活用した問題解決

新課程「情報I」において重要なことは、「情報そのものを学ぶ」科目であるという認識を持つことだ。ソフトウェアを使ってグラフをつくれるようになること以上に、グラフを使って何を伝えるのか、グラフをどのように読み解くのかを考えさせることが大切になってくる。

情報そのものを学ぶ目的は、コンピュータを活用して問題解決ができるようになることだ（投影スライド1）。例えば、学校祭を盛り上げるための魅力的なポスターをつくるのは「情報デザイン」、いくらで売れば一番利益が出るかをシミュレーションするのは「プログラミング」、過去の来客数を分析して傾向を判断するのは「データサイエンス」だ。

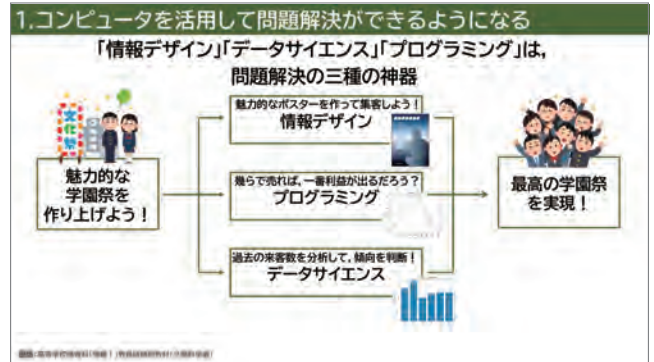
「情報I」ではコンピュータの仕組みやネットワークの考え方などの情報科学（computer science）をしっかり学ぶことも重要だ。ただこれも、コンピュータを活用した問題解決という文脈の上にある。これも学校祭を例にすれば、レイヤーという概念を知っていることで効率的にポスターのデザイン制作を進めることができる、という具合だ。

手段としての「情報」ではなく、 「情報」そのものを学ぶ

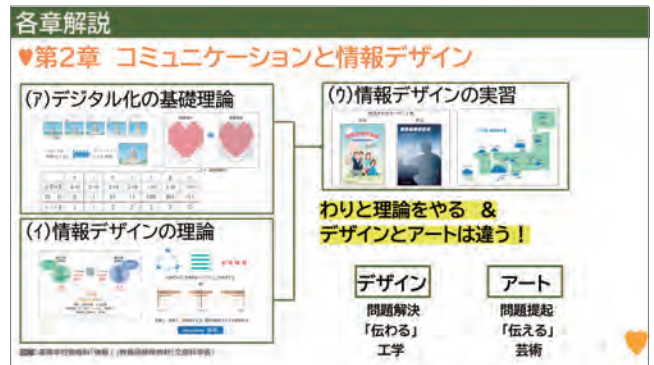
「情報I」は、「情報社会の問題解決」「コミュニケーションと情報デザイン」「コンピュータとプログラミング」「情報通信ネットワークとデータの活用」の4単元から成る。内容面で誤解されやすいのは「コミュニケーションと情報デザイン」「コンピュータとプログラミング」だ。情報デザインでは人の視覚特性などの理論面を学んでポスター作成などの実習に入る。情報科のデザインでは正しく「伝える」ことを重視しており、芸術科のアートとは異なる（投影スライド2）。また、「コンピュータとプログラミング」も、まずコンピュータの動く仕組みを理解してプログラミングの技法を学んだうえで、現実的な問題解決に取り組む（投影スライド3）。つまり、科学的理解に裏打ちされた「情報活用能力」の育成が求められていることがポイントとなる。

「情報I」ではプログラミングが必修ではあるが、プログラミングはあくまでも「情報」そのものを学ぶための手段である。プログラミングを習得すればそれでよいという考えからは脱却したい（投影スライド4）。

●投影スライド1



●投影スライド2



●投影スライド3



●投影スライド4

まとめ

✗ 「情報I」で「プログラミング」が必修化。
「プログラミング」の勉強が一番大変!

◆全体として「情報I」は消費者教育(「情報II」はエンジニア養成的)。
◆プログラミングも「目的」というより、情報を学ぶ「手段」の1つ。

「プログラミングスクール」は数多あるが、
「データサイエンススクール」「情報デザインスクール」
「コンピュータサイエンススクール」はあまり無い。

「他教科」免許状指導者が大活躍する機会かも
プログラミング > 旧数学B「数値計算とコンピュータ」
データサイエンス > 数学I「データの分析」、理科実験
情報デザイン > 美術「色彩理論」……。

22年度を見据えた 授業計画検討のポイント

22年度から、本校では「情報Ⅰ」は高校1年生で2単位必修とする。公表されている共通テストのサンプル問題を見ると、情報科は日常生活との関連が極めて強い内容となっている。つまり、実際に学校祭でポスターをつくったり、部活動でデータ分析して戦略を立てたりした経験がそのまま生きてくる。総合的な探究の時間とのかかわりも強い。そのため、本校では、授業以外の時間での学びが充実している1年次に「情報Ⅰ」を置いた。

本校では、既に19年度から「情報Ⅰ」を意識した授業設計を50時間で組んでいる(投影スライド5)。「情報Ⅰ」は、重く扱う単元を絞っても、他分野もそのなかで扱えるのが特徴である。例えば、3学期のデータサイエンスの実習のなかで、発表スライドを情報デザイン的に扱ったり、情報分析をプログラミング的な発想でやってみたりすることで、複数の単元を並行して深めることができる。逆に言えば、重く扱う単元を絞ることで教師も生徒も負担感は少なくなり、消化不良が起きにくい。

なお、本校では、プログラミングを1学期と2学期で分割している。情報科は、積み上げ要素が薄く、苦手を引きずらないですむ傾向があるため、プログラミングも、1学期でブロックプログラミングで楽しさを重視し、2学期ではテキストプログラミングで受験対応という流れにした。

コンセプトを押さえた工夫があれば 授業は大きく変わる

授業実践においては、「1時間目に何をやるか」「時間数が足りないなかでの実習時間の確保」「Officeソフトの実習しかできていない」といった疑問を聞くことが多い。

1時間目の授業開きとしては、メディアリテラシーをテーマにするとよい(投影スライド6)。情報はパソコンの扱い方を学ぶのではなく、情報そのものの扱い方を学ぶことをまず生徒に伝える。グラフの見せ方やアンケートの信頼性などクイズ的に生徒に問いかけながら、情報の裏側を見る力を見ていくのが目的だと説明するとよいだろう。また、Officeソフトの実習しかできていないという場合も、既存のプレゼン実習を少しアレンジすることでデータサイエンスになる(投影スライド7)。Officeソフトを使ったプレゼンテーションでは、「統計調査を加えて説得力のあるプレゼンテーションに」とアレンジするだけで授業が変わる。外れ値や異常値が発生する理由やアンケートでの適切な質問項目の作り方などを学べば、データサイエンスの領域に入っていく。グラフを盛り込ませることで評価もしやすい。
※アーカイブでは上記を含む5つの疑問について武善先生が具体的な実践例を交えて回答しています。

●投影スライド5

After <「情報Ⅰ」の時間は「情報Ⅰ」に集中>

2019年度～(「情報Ⅰ」を見据えた設計変更開始)

1学期(20) 情報深しい! ●メディアリテラシー(1) ●情報デザインの理論(3) ●ピクトグラムの作成(3) ●いわゆる情報モラル(3) (個人情報,知的財産権...) ●デジタル化の理論と実習(4) ●プログラミング(5) ●コンピュータサイエンス(1)	2学期(20) コンピュータを使いこなそう! ●プログラミング(4) ●認知科学(AI,認知心理学)(3) ●コンピュータサイエンス(2) ●モデル化とシミュレーション(4) ●ネットワークの理論(3) ●情報システム(2) ●大規模データの処理(2)	3学期(10) 自分で結構できる! ●データサイエンス実習(8) ●情報社会の未来を考える(2)
--	---	--

ほぼ学習指導要領通り
重く扱う単元は1つに絞ると、
教員も生徒も、消化不良、
時間不足を起こしにくい

重く扱う中で、他分野も扱える!
・「発表に使うスライド」で情報デザイン
・分析手法の中で「プログラミング」
etc...

第1章 問題解決
第2章 情報デザイン
第3章 プログラミング
第4章 データサイエンス
認知科学

●投影スライド6

1時間目に何を扱うかは、何より大切。

<メディアリテラシー>

「情報」=パソコンの時間 → 「情報」の扱い方を学ぶ時間 (パソコンは手段,人間理解のメタファア)

●投影スライド7

「データサイエンス(個人の統計処理)」のネタ

既存のプレゼン実習を少しアレンジすれば「データサイエンス」に!

「今日から、みんなに『自分の好きなもの』を発表してもらいます!」
ただし、
「統計調査を行い、『自分の主張』を説得力を持って表現してください!」

10 / 18



先生方へのメッセージ

情報科の学びの本質は、「試行錯誤」そのものにあります。コンピュータでは容易に「元に戻る」ことができ、時間数の制約が強い学校教育のなかでも失敗経験を積みやすい教科です。プログラミングを書く時も、まずは試してみて、結果を見て考え、修正し、また試してみることを繰り返します。これが楽しいのです。先生方もぜひ、これまでの「情報」の実践を土台に、データ分析や情報デザインの要素を少し入れてみるなどして、試行錯誤を楽しみながら、新しい授業をつくっていただきたいと思います。

武善先生の実践から、「情報Ⅰ」に向けた準備として、「マインドセット（情報そのものを学ぶ、教師自身が試行錯誤を楽しむ、など）」「前向きなダウンサイズ（単元の絞り込み、スリム化）」「積極的な連携（他教科や外部リソースとの連携）」が欠かせないこと、そして、授業を通して身につけた資質・能力の「目標設定」も重要な観点であると言える。

新課程1期生の入学まで、まずは今年度の教科「情報」において、授業のなかで次年度につながる実践の一つでも行ってみることも重要だろう。武善先生の講演には、すぐに取り入れることができるヒントが数多く紹介されているので、このアーカイブをぜひ参考にいただきたい。

■新教育課程「情報Ⅰ」に向けて大事にしたいこと

新教育課程「情報Ⅰ」に向けて大事にしたいこと

- マインドセット**
 - レクチャーからコーチングへの転換
 - 自学自習で取り組むことのできる仕組みづくり
 - 先生自身も試行錯誤・チャレンジ
- 前向きなダウンサイズ**
 - 授業で取り扱う内容のスリム化
 - エッセンスを抽出して取捨選択
 - 実践の中で理論を学ぶことを意識
- 積極的な連携**
 - 他教科との連携
 - 中学までの学習内容、定着度の確認
 - 外部リソースの積極的な活用
- 目標設定**
 - 情報の授業を通して身に付けたい力を再確認
 - 大学入試に向けた到達度の設定
 - 1年間の授業で学習した内容の定着を確認

実施の目安

- 今年度の授業の中で次年度につながる実践を一つもやってみる
- 次年度の授業で活用できる教材や素材のめぼしを付けておく
- 他教科で、どのような時期にどのような内容を学習しているか確認しておく
- 到達目標として1年生でどこまでできればOKの基準を設けておく

「情報Ⅰ」における先生方の授業と生徒の学びのご支援に向けて、学習教材とテストを22年度からリリースします！

「情報活用力」学習支援教材



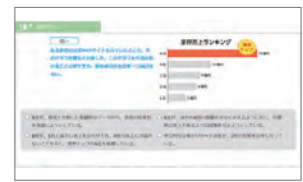
重要なポイントをまとめた動画、ブラウザだけで実施できるプログラミング教材など「情報Ⅰ」の学習が丸ごとできる教材です。

無料サンプル公開：
公開中

無料サンプルダウンロードはこちらから！
<https://www.p-pras.com/otameshi/>



「情報活用力」定着度確認テスト



結果は受検後即確認ができる完全 CBT 型テスト。問題解決型を含む新課程を踏まえた出題です。

無料サンプル公開：
2021年11月15日～
(予定)

※内容は制作中のものであり、変更の可能性があります。

Webセミナーアーカイブのご案内



Webセミナーの詳細はハイスクールオンラインサイトでご視聴いただくことができます。
ハイスクールオンラインTOP > 新課程 > 【特設コーナー】ウェブセミナー 新課程 教科「情報」に向けて今、始められる準備
https://bhsso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/index.shtml

問い合わせ先

株式会社ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 教育情報部 教育情報センター
◎お客様サービスセンター
TEL 0120-350455 (通話料無料)
受付時間 (祝日・年末・年始を除く) 月～金 8:00～18:00 土 8:00～17:00



観点別評価、探究、教科「情報」… 新課程で困ったら！

Benesse High School Online

リニューアル！

新課程ページをチェック！

新課程1期生の入学に向けて準備を進めていらっしゃる先生方から、お悩みの声を多く伺います。そこで、先生方のご指導にお役立ていただける新課程コンテンツを拡充いたしました！

ハイスクールオンラインTOP > 新課程

https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/index.shtml

* アクセス方法の詳細は次ページへ！

オススメポイント①

セミナーアーカイブで 新課程のポイントがわかる！

ダイジェストリポートも掲載しておりますので、短時間でポイントを把握できます。校内研修での活用もおすすめです！各コンテンツ内で全国の学校の事例を紹介しておりますので、ぜひご覧ください。



オススメポイント②

資料一覧を使えば 必要な情報が簡単に見つかる！

有識者の解説から先進校の事例まで、様々な情報を掲載しております。キーワードや資料形式から検索いただけます！



※画面イメージは8月中旬時点のものです。変更になる可能性があります。

◆ Benesse High School Online アクセス方法 ◆

①ブラウザで「ハイスクールオンライン」を検索

②ハイスクールオンライン TOPへログイン

※ログインにはID、パスワードが必要です。分からない場合は紙面下部に記載の「webサポートデスク」までご連絡ください。

③画面を下にスクロールし、緑色の「新課程」ボタンをクリック



④各コンテンツをクリックしてご覧ください！

※画面イメージは8月中旬時点のものです。変更になる可能性があります。

メインコンテンツ



ハイスクールオンラインに関するお問い合わせはこちら
Webサポートデスク 0120-350124 (通話料無料)
受付時間/月～金8:00～18:00 土8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

お客様サービスセンター（通話料無料）

0120-350455

受付時間 月～金8:00～18:00／土8:00～17:00

（祝日、年末・年始を除く）